
東方 自来也が幻想入り 続

くりすていあーね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 自来也が幻想入り 続

【Nコード】

N0624Q

【作者名】

くりすていあーね

【あらすじ】

続編です。

自来也が幻想入りしたら、の続き。

シリーズ設定をミスってしまったので、しょうがないので第二話から始まります。

分からない方はまずは第一話を見てね！

キャラ崩壊が否めません。

もこたんINしたお！

現在、自来也は里外れに位置する古ぼけた小屋に住んでいた。

何故彼がこのような地に居を構えたのかと言えば、少々時系列を戻す必要がある。

大蜘蛛妖怪を倒した後、すぐに現場を後にした自来也。

人っ子一人いない街通りを歩くだけ、先程まで繁盛していた団子屋には店主すら不在であった。

周りを観察しながら歩くだけで、ただ時間だけ過ぎてゆく。

身一つで異郷の土地に、意識が無かったとはいえ気がついたら森の中に倒れていたのだ。

住む所はおるか、食べる物も頼れる人もいないこの状況にでるのは溜息ばかりである。

自来也は後悔していた。

あの大蜘蛛妖怪を退治した事を里民に知らしめ、身辺事情を里の長にでも訴えれば

この状況など、簡単に打破できたのかもしれない。

しかし、自来也の性格的にもそれは好ましくなかった。

いくら大見得切って颯爽と現場を後にしたとはいえ、その後の事を考えていなかった結果が今に至る。

「むう、困ったのう」

歩くだけで、気がついたら既に昼時であつた。

里民も徐々に持ち場に帰りつつあり、再びその活気を見せている。腹の虫が泣き喚くが、今の状況ではどうしようもない。

治まれ、と擦つてはみるがその効果は実感できない。

そんな事をしながら町並みを眺めていると、またしても里民の視線を感じる。

殺気立つた視線は感じなかったが、その視線は最初と同じ奇異なモノを見る目であつた。

「待て」

正面からの一言に思わず立ち止まる。

凜、としたその一言。対峙しただけで理解する事ができる。相当の実力者である事を。

受け答えるのも億劫だった自来也は、視線を落としたまま相手の発言を受け止める事にする。

「君と少し話がしたい。話の内容は、聞かなくても解かるよな？」

まるで職務質問かのような対応、そして”君”などと呼ばれ、少々であつたが嫌悪感を抱く。

「うーむ、ちと何の事が思い出せんでのう。だが、かのような美人さんに声をかけられたとあれば
ワシとしてもホイホイと着いていかざるをえんのオ！」

自来也の冗談交じりの戯言に、呆気にとられる慧音。

「君は面白いな。どれ、着いてきてくれ」

柔らかな笑みを零しながらそう慧音が言う。
自来也もそれに習い、後を追うのであった。

暫く歩いていくと、一軒の寺子屋に到着する。

中に入ると、内装の作りから察するに学問を学ぶところだろう、と理解する自来也。

そこから更に推測すると、目の前を歩く人物が教師であるという事は火を見るよりも明らかである。

寺子屋の更に奥に入り、作業部屋のようなところに連れて来られた。現代で言う職員室であろう。

「まずは里を代表して礼を言わせてもらう。君のおかげで里の被害を最小限に抑えることができた、助かったよ。」

自来也としては好都合、里を代表するとあれば恐らくは発言にも力がある人物なのだろう。

「何、ワシとしても人の為に働けたとあれば本望よ」

「ふふ、そうか。私の名は上白沢慧音、慧音と呼んでくれ」

「ワシは自来也。慧音さんはこの里においては何かの、長の一人娘といったところか?」

発言に力があると推測した自来也は、予想も立ててそう慧音に訊ねる。

「そんな大それた者じゃないさ。私はこの里の寺子屋で、子供達に学を教えてる程度さ」

予想外の解答に、思わず顔を顰める自来也。

その風貌をただだけで強者と判断できるのに、里で従事している事は寺子屋――

「先程のような非常事態になれば、里の守護者として動く時もあるがな」

なるほどのオ、と呟く自来也。

そこからは体感で数秒ほどの静寂が起きた。

恐らくこの静寂は続くだろうと思っていた自来也は、予想外の個所からの応答が来る事を知らなかった。

「ははっ、若いんだから致し方ないだろう。丁度昼時だし、馳走してやろう」

そう言いつつ席を立つ慧音。

若い頃ならば腹の虫に思わず赤面する場面であるが、いまや自来也も五十四の老体――

「若いとな？」

既に席を後にした慧音、その疑問に解答する者もいなかった。

暫くすると慧音が手料理を振舞ってくれた。

作業部屋と言っても、埃塗れで書類などが乱雑に置かれているわけでもない。

女性の部屋、と言った感じに整理されているものはキッチンと整理されており、飾りつけなども相応なものであった。

和風の料理が運ばれ、多少であれど好き嫌いの自来也も苦も無く食べる事ができる。

「すまんのオ、実は昨日から何も食べておらんでな」

言っや否や料理に手を付ける自来也。

「気にするな、此方としても里の危機を救ってくれただけで頭が上がりらんからな」

頭が上がりと言いつつも、どうみても十台も過ぎるであろう程度の年齢の女性が五十過ぎの爺に話す態度ではない。と自来也は考えながらも食を進める。

「ところで、見たところ外来人のようだが。幻想郷にはいつ迷い込んだのだ？」

「さあのう。気がついたら森の中で倒れていた。それも昨日だ」

「昨日か。なんだ、つい最近ではないか。それでは行き先などもまだ何も決まっていらないのか？」

慧音の質問に肯定する自来也。

それでも腹の虫はまだまだ喚くのをやめないようで、食を進める手も止まらない。

「それなら…そうだな、博麗の巫女のところか、それともこの里で居を構えるか」

——博麗。この地に降りてから発見ばかりであつたが、またしても発見である。

「外来人、というのはワシの他にもおるのかのオ？」

「最近はよく現れるようになったな。昔と比べて、だがな。博麗の巫女ならば元の世界に戻す事も可能だろう。」

ただし、前の世界で生きていればな。慧音が付け加えた。

「死後にこの地に辿り着く事もあるんかのう？」

「稀にいるんだ。死後に、原因は不明だが恐らくは人々に忘れ去られてしまったのであろう。」

そついった者達が迷い込んで来る事もある。」

「——そうか」

食を進める手が一瞬止まったが、再開する。

慧音が溜息を一つ吐くと、自来也に再び質問をかける。

「そついえば君は、どうしてそんな口調なんだ？」

まだ若いのに、と付け加えて慧音。

話題を変えてくると思っていた自来也だが、その話題もまた変わったものである。

「どうしたもこうしたも、見ての通りワシは老いた爺。相応の口調

にもなるというものだ」

何を馬鹿な事を聞くのだろう、と思いつつもやはり食の手は止まらない。

再び慧音が溜息。

慧音が何やら席を立ち、再び戻ってくる。その手には何やら銅鏡のようなものをぶら下げて。

「君は鏡を見た事がないのか？」

そう言つて持つてきたものを自来也に向ける。

面倒臭そうにそれに目を向ける自来也が驚愕した。

口内に含まれているモノを全て噴出して。

「じつじつ、コレは…？」

今度こそ食を止め、慧音から鏡をひったくる。

まじまじと鏡を見つめるその光景は、何も知らない人が見れば自分好きのナルシストだと想像するだろう。

何故自来也がそこまで驚愕しているのかと言えば、簡単だ。

「わ、若返つとる…」

答えは至つてシンプルなものであった。

そつ、若返つていたのだ。

年齢にしては恐らく目の前の女性と同じ程度であろつ。

派手な服装が似合わない、彼の世界にあつた中忍の制服がまだまだ似合つていた時期である。

「これは一体…。慧音、さん…？」

今にして思えば、声のトーンが微妙に違うのも伺えた。

自らの身に起きていた異変を目の前の女性に訊ね様とした自来也。

しかし、目の前にいた女性は先程と風貌がまったく違っていた。

顔面はドロツとした、解かりやすく言えば咀嚼した食材が顔面に広く付着していた。

「君の行動は驚嘆に値するよ、自来也君。」

「いやはや、申し訳ない。忍法『咀嚼返し』と言ったところですかのオ…」

乾いた笑みを零しながらもそう応対する自来也。

しかし、気付くと目の前から忽然と姿を消している慧音。

——そこからの記憶が自来也には残っていないかったようであった。

その後、兎にも角にも住む場所がなければ始まらないという事なのでまずは居住場所の確保に移った。

この時点で自来也は博霊の巫女ではなく、里に居を構える事を選択したのが解かる。

自来也自身にも様々な葛藤があったのだろうか…それはまた別の話である。

「さーて、まずはサバイバルだの」

里外れに位置していると言っても、あくまで里内の場所なので山や森に住んでいるわけではない。

それでも里の市や、盛んな地と比べると危険な場所であるには変わりない。

自来也の住む小屋の近くには何も無い。が、少し歩けば川や森林等の自然がある。

少し遠くを眺めてみれば竹林なども見えるので、比較的立地条件は良かった。里中心から遠い事を除けば。

何故このような辺鄙な土地を選んだのかと言えば…

「すまないが自来也君、この里に住み着く事は構わないのだが…肝心の敷地がないのだ。」

どうやら里の人口も増加の傾向にあるようで、住む事は歓迎されているが肝心の家がないとの事だ。

そうして慧音が提供してくれたのが、里外れにある小さな小屋であった。

「近場に川が流れておるから水周りは大丈夫として、川が流れているのなら魚もおるだろう。」

幻想郷に降り立ってから自身の変化に気がついた自来也。

その代償として額に大きな痣を作ってしまったのが痛い。

どうやら里の守護者の頭突きは自来也の身に着けていた額当てすら貫通してしまう威力のようだ。

「おお、おるおる。これなら当分の間は食には困らんだろう」

自来也が見つけた川には立派な川魚が泳いでいた。

「どれ、まずは何匹か頂こうかの」

言うや否や、腰に携帯していたクナイで優雅に泳いでいた川魚一撃、二撃と捕獲していく。

やろうと思えば、火遁の術で川を熱湯に変えて一気に捕獲する事もできるが…

そんな事してみようものならばあつという間に川魚の生態系が崩れてしまうことであろう。

そんなこんなで、自来也の新しい家屋での生活が始まるのである。

決して豪華とは言えないが、近場に糧も川もあるこの小屋は、自衛能力のある自来也にとっては

まさに理想の土地であったのである。

——自来也が里外れの小屋で暮らし始めて数ヶ月が経った。

その間に何もなかった、といえば嘘になるであろう。

何もなかったというよりは、ありすぎて困るほどであった数ヶ月である。

郷に入っては郷に従え。この言葉が非常に似合う数ヶ月であった。

ただずっと小屋暮らしをしていたかと言えばそうでもない。

その間にも事あるごとに人里の繁華街…つまるところの市場などに
出向いていた。

目的は何かと言えば、彼の性格を考えていただければ簡単であろう。

「ぬっふふふ…」

自来也の懐は暖かった。

里外れというのは、何も危険だけで多いわけではない。

ちよっと里に出れば、珍しい魚や動物などが生息しているわけで、狩猟した珍しい動物や魚などを市場に持っていけば、このご時世、法などに触れるわけもないので

簡単にお金を稼ぐ事ができる。

勿論、顧客層は広いわけではないので簡単に稼げると言ってしまうと少々語弊が生じるが。

そして何よりも、彼は若返っているのだ。

その溢れるパワーと情熱は何物にも変えがたい。

その力の矛先がどこに向かうのかと言えば…

「そこのお兄さん、今なら可愛い娘っ子が待ってるよー!」

昼間に真面目に店を営んでいる者もいれば、夜中こそが舞台とばかりに働く者も存在する。

自来也の溢れる情欲が向けられる先は勿論…

「本当かッ！ それなら少し相手をしてもらおうかのオ……」

したり顔の若い青年、下卑た笑顔で出迎える中年の男。

この構図から想像できるものは簡単であろう。

懐から金銭をちらつかせながらも、入店しようとする自来也に刺客が向けられる。

「へいへい！一名様ご案内……ッ!」

自来也を出迎える中年の男の顔面が見る見るうちに蒼白になっていく。

それに気がついた自来也が、店主に習い後ろを振り向くとそこには

「やあ、自来也君。お楽しみのところ申し訳ないね」

言葉と同時に振り向く自来也の顔面に手刀を叩き込む慧音。

ゴツ、と鈍い音と共に悶絶する自来也。

それを好機とばかりに店内に逃げ込む中年の男。

「——ッ……!!何をするんじゃ先生ッ!!」

お楽しみを邪魔された自来也がこぞとばかりに慧音に噛み付く。

「何をするも、人の道を踏み外そうとしている者が目の前にいたとあらば、それを救うのは当然であろう?」

「……まったく、余計なお世話なのオ……」

「何か言ったか?」

「なーんも。」

つい最近まで五十も過ぎた爺さんとは思えない発言であるが、現在は十台も終わるであろう好青年。

ただし見た目に限る、だが。精神年齢や口調などはまだまだ年寄りの頃と変わっていない自来也であった。

「寺子屋に私の友人が来ている。せっかくだから君の事を紹介しよ

うと思つてな。」

「物好きな友人じゃのオ、こんな真夜中に。」

楽しみを奪われ、若干不貞腐れ気味の自来也がぶつきら棒に答える。
慧音に連行されるようにして、寺子屋へ向かう自来也であつた。

数ヶ月の間に、すっかりと前の世界のように女遊びにハマつてしまつた自来也。

悪い事もあれば良い事もあるのが幻想郷である。

良い事と言えば、自来也が寺子屋で子供達を指導していることだ。
指導と言っても、お世辞にも学力があるとは言ひ切れない自来也。
ただ、その溢れる力と、先程別の方向に向けられた情熱で、身体を動かし鍛える指導を行っているのだ。

勿論、毎日やっているわけではない。この数ヶ月の間でもまだ両の手で数えられるほどである。

慧音に連行され、寺子屋に到着するとそこには銀髪の少女が一人。
白い髪に赤い瞳。

慧音と同様に、一目見ただけでその実力の程が解かる。

「ただいま。——ほら、連れて来たぞ」

「・・・」

寺子屋に入るや否や、慧音のいう友人は既に待機していたようだ。

慧音の挨拶にも無言の彼女は、ただ自来也を見つめるばかりであった。

「…すまん自来也。この娘は少々人見知りなところがあったな。」

慧音が詫びを入れるのと同時に、沈黙を貫いていた少女が口を開く。

「妹紅よ、藤原妹紅。よろしくね」

「自来也だ、よろしくの」

お互いに挨拶を交わしたところで、妹紅が自来也に違和感を抱く。初対面であれば何となく感じるであろう。

若いのに口調が何とも爺臭い。——皆さんのご友人にもそういう方はいませんか？

「やれやれ」

挨拶を見届けた慧音が安堵したかのように呟いた。まるで保護者のような立ち位置の慧音である。

その後も、自来也が講師を勤める授業に度々参加していたりする妹紅。

交わした言葉は少ないが、共感できる事などは彼女なりにあるのであろう。

勿論、慧音の担当する座学が退屈すぎるので、あえて自来也の講習に参加しているのもあるのだが…。

色々あった数ヶ月間であつたが、この数ヶ月間で全てが終わるわけではない。

勿論これからも色々と騒動ごとに巻き込まれていくのであろう。そして、その始まりは至極単純なものである。

「ねえ」

妹紅が自来也に語りかける。

「なんじゃ、妹紅」

対する自来也もそれに応答する。

稀にとはいえ、講師と生徒という立場だが、それよりも友人という感情が強いのだろう。

お互い名指しで呼ぶ仲になっていた。

「自来也って、強いのか？」

雑務で忙々と動いていた慧音の足が止まった。

「強い？どうかのう、強いのかもしれんし、弱いのかもしれん。ワシにゃ解からんのオ！」

そう暁して話す自来也。お得意の高笑いも忘れない。

妹紅と自来也の会話に慧音が混ざる。

「駄目だぞ妹紅、退屈なのを理由に決闘は。」

「えー、いいじゃない。自来也だって退屈でしょうし」

慧音のレフェリーストップに妹紅からのブーイング。

それを眺めるだけでも自来也にとっては良い暇つぶしなので、もっとヤレといった心情であろう。

「あ、それなら…」

何かを思いついたように妹紅から提案される。

「”スペルカードルール”でやろう!」

ね?と言った感じで提案する。

自来也が真っ先に疑問に感じた、”スペルカードルール”という単語。

「スペルカードルール、とな?」

その疑問をぶつけた時点で決闘は決まってしまったようなものなのかもしれない。

『スペルカードルールは、幻想郷内での揉め事や紛争を解決するための手段とされており、

人間と妖怪が対等に戦う場合や、強い妖怪同士が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルールである』

慧音が手渡した書物に書いてある事を朗読する自来也。

その書物には色々な物事の説明が書いてあり、スペルカードルールについても記されていた。

「ふむ、要は自分の技をカードに書いておけば良いんじゃない？」

「ま、強ち間違えではないわね」

物臭な自来也は、ルールを完璧把握する気はないらしく、重要事項だけを読み纏めていた。

妹紅も遊び感覚であり、当然殺し合いに発展させるつもりはないので基本的事項を抑えてもらえればそれで良いという感覚であつた。

「気をつけるよ自来也。当たり所が悪ければ死ぬ事もあるからな。そして負かした相手を追撃するのも禁止されているからな。」

慧音が説明を付け加えた。

「解かった解かった。それで、肝心のカードってのはどうすれば良いんじゃない？」

そう言つと慧音が白紙のカードと筆を用意してくる。

「必ずしもカードである必要はないが…、一応簡易的なセットはあるからな。使つと良い。」

そこから暫く時間が経ち、自来也が自分のカードを作り上げた。昼寝していた妹紅もやっと終わったか、と言わんばかりに戦いたくてウズウズしていた身体を起こす。

一方、慧音のほうも決闘には反対であつたが、自来也の実力が気に

なっていたのであろう。

自来也のスペルカード作りに付き合っていた。

スペルカードも作り終えたという事で、外の広場に出るお三方。

「ここなら誰もいないだろう」

慧音がなるべく人通りの少ない広場を選び、そこを決闘場とした。

「それじゃあ、手早く終わらせるぞ。枚数は2枚で先に使い切った
ほうか戦闘が継続できない
状態になったほうが負けだ。」

「分かったわ。さ、早くやろう！」

その場で軽い準備運動を始める妹紅。
こんなに張り切っている妹紅を見るのは初めてだな、と自来也は思った。

その姿にかつての弟子を連想させてしまう辺り、彼に流れる師の心は強いとも思える。

「ワシも、いつでも良いぞ」

自来也も準備万端の旨を慧音に伝える。

「よし、それでは始めっ！」

慧音が戦闘開始の合図を出す。

それと同時に妹紅が勢いよく跳躍する。
そのまま重力に逆らい落下するかと言えば、そうではない。

「ほオ、お主も空を飛べるか！だがワシは生憎飛べんどのオ」

軽口を叩き、牽制と言わんばかりに手裏剣を一枚、二枚と投げる。

それらを軽々と避ける妹紅。

お返しだ、と妹紅が炎の弾幕を放つ。

「先生の言ったとおりだのオ、所謂火遁みたいなもんか！」

対する自来也も予想通りと、それらを跳躍して避ける。

妹紅は追撃に更に炎を放ってくる。

「風遁・烈風掌ツ！！」

自来也が素早く印を結び、妹紅の炎に迎撃する。

自来也が放った術はスペルカードによるものではなく、自身で発動したものだ。

スペルカードならば、発動条件が難しい忍術も簡単に発動できるようになるので、

このような比較的簡単な忍術はスペルカードに変換していない。

つまり、簡単な忍術は自身で結び、超高等忍術、奥義レベルの忍術はスペルカードにより

発動を手軽にさせている。その為、自来也にとっては戦闘を楽に運べるようになってい

ただし、スペルカードになっているので、一度しか発動できないのが難点だが。

自来也の放った、風遁・烈風掌により妹紅の放った炎が全て鎮火された。

妹紅はこの状況に、へえ、と少々 of 驚きと共に自身のアドバンテージを上げていた。

ここで妹紅が更に攻勢に出る。

「不死『火の鳥 - 鳳翼天翔 - 』」

妹紅がスペルカードを発動する。

巨大な火の鳥、フェニックスを模したかのような炎の弾幕が自来也を襲う。

自来也からすれば、炎の形が鳥だろうが不死鳥だろうが巨大な事には変わらないので、

その風貌については特に気にせず、ただ対抗する事に念頭をおいていた。

「さあ、風で吹き飛ばせるもんならやってみなよ！」

妹紅が挑発を含めてそう発言する。

「ほオ、…こんなに馬鹿でかい炎ともなれば、生半可な風を送り込んだところで

その威力を助長させるのみだのオ」

言いつつも、炎の弾幕からバックステップで大きく距離をとる。

— 本来ならば大瀑布の術で一気に破りたいところだが、いかんせん、そんな事をすれば里が一気に崩壊してしまうかもしれないのオ…

妹紅のスペルカードを打ち破る術を考えている間にも、巨大な炎の弾幕が自来也を襲う。

「水遁・水陣壁ッ!!」

自来也を中心に、水の壁が出来上がる。
妹紅の放った炎が水陣壁を襲う。

「へえ！面白い事できるんだね！」

そう言いつつ、妹紅は炎の出力を上げる。

「くッ…熱量が大きすぎるか…ッ」

自来也が発動した水壁も、妹紅の炎は鎮圧されずに更にその威力を上げて襲い掛かる。

水は見る見るうちに蒸発し始め、その厚みを薄めてゆく。

「ほらほら、早く何とかしないと丸焼きになっちゃう…よッ！」

発言と同時に更に出力を高める妹紅。

炎が更に巨大化し、瞬く間に自来也の作り出した水壁を包み込む。

「お、おい妹紅…」

慧音がレフェリーストップをかけようとするが、妹紅には届かない。

「そらッ!!」

ここぞとばかりに炎の威力を最大限まで高める。
掛け声と同時に起こったのは、自来也を包み込んでいた炎が対象物を失くし、消え行く様であった。

「あちゃー…もしかして、やり過ぎちゃった？」

空中にいた妹紅が着地、すぐに自来也のいた場所に駆けつける。

そこには何も残っていなかったが、地面が真っ黒になっている辺り、集中砲火を受けた様を連想できる。

慧音も慌てて駆けつけてくる。

「妹紅！加減をしるとあれ程――」

同じく自来也のいた場所に駆けつける慧音であったが、途中で感じた異変に気付き立ち止まる。

そして次に慧音は驚きの眼差しで妹紅を凝視していた。

「――ッ！！！！」

驚愕、まさにその一言であった。

妹紅は突如足首に感じた、ナニかに掴まれる感触に。

慧音は地面から突如生えてきた人間の腕に。

「影分身も見破れんようでは、忍に勝つのは十年早いのだ！――土遁・心中斬首の術！！」

術名と共に、地面に引きずり込まれる妹紅。

それは空中を優雅に飛んでいた鳥が、地上の捕食者に狩られる様であった。

完全に地面に引きずり込まれ、頭一つ地上に出る形となった妹紅。

「なアッ！？」

「本来ならこのまま拷問に持ってゆくのが筋だが…。どうする、まだやるのかのオ？」

ニヤニヤ、と無様な姿に成り下がった妹紅を見据え、そう自来也が言い放つ。

「…冗談、私はまだまだやれるッ!!」

そう言いつつ、頭を右に、左に、そして上に向けて脱出を試みるがどうにも上手くいかないようだ。

それを見た自来也は、ならば拷問に移るするか。と言い、懐から凶器を取り出す。

「ま、まさか…や、ヤメロオオツ!!」

数分後、妹紅の顔面には自来也によって描かれた”芸術”が残っていた。

色白で、大よそ美人の部類に入るのであろう妹紅には墨で描かれた立派な髭。

眉毛は平安時代の人間が見れば感嘆の声をあげるであろう太ましい眉毛。

そして頬には、子供達が見れば喜びの声をあげよう、可愛らしい。と×の芸術。

「ガッハッハ！奴さんも美人になったもんだのオ！」

ゲラゲラと大きな笑い声をあげる自来也に

「妹こ——ブッ」

我慢の限界に達したであろう、慧音が静かに笑うのみである。

妹紅は黒く象られた顔面を真赤にさせ、俯いたままプルプルと震えるのみであった。

暫くその状態が続くと、慧音がハツとし、妹紅のほうへ再び視線を向ける。

「…拙い、自来也!」

何かに気付き、咄嗟に魔法障壁で防御の体勢に入る慧音。

「ぬっ!、土遁・土流壁ッ!!」

一瞬で印を結び、土流壁による防御の体勢に入る自来也。

そして目の前の9割方埋まってしまっている妹紅の怒りが有頂天に達し――

「ふっ…ふーざーけるーなアーツ!!!!!!」

言葉と同時に、妹紅を中心に大爆発が起こる。

土流壁で防いだ自来也であったが、その爆風には耐え切れず思わず吹き飛ぶ。

慧音のほうは吹き飛ぶ事を想定してキチンと受身をとっていた。

そして妹紅は溜まりに溜まった怒りを爆発させ、埋まっていた部分を中心に巨大なクレーターが出来上がった。

「ハア…ハア…、馬鹿にして…もう手加減しないよッ!!」

息を切らしつつも、妹紅が宣言する。

「蓬萊『凱風快晴・フジヤマヴォルケイノ』」

怒りと共に放たれた妹紅の最後のスペルカード。
凶悪な炎がまるで意志をもったかのように、自来也へ向けて放たれる。

「おい妹紅！その技は――」

「大丈夫よ慧音、ちゃんと加減するし何よりも…慧音も笑ったでしょッ！！」

理性は残っておるが、もう考え付かずのようで標的は自来也の他にも慧音も追加されたようだ。

慧音が危惧しているのは、いくら里外れといえど既に被害のかすぎるこの場を少しでも最小限に抑えたいからだ。
目の前には大きなクレーターが完成されており、その後始末をするであろう慧音にとっては溜息ものである。

「自来也君！妹紅のスペルカードは最後の一枚、あれをブレイクすれば君の勝利だ！」

何としても里への被害は食い止めてくれと言わんばかりに自来也に激を飛ばす慧音。

そして我武者羅に突撃を仕掛ける妹紅。

そんな状況にも関わらず、自来也は…

「案ずる事はないですぞ、先生。妹紅ではワシを倒せはせんよ、絶対のオ」

不敵な笑みを浮かべ、そう言い放つ自来也。

「おおオオツ自イイ来也アアアツ!!」

怒りと羞恥心で我を忘れた妹紅が強大な炎と供に突撃を仕掛ける。最早戦法などどうでも良い、自らの手で倒す事に意味がある。と言わんばかりに

物凄いスピードで自来也に迫る。それはまるで一つの隕石のように。対する自来也は臆する事もなく、正面に妹紅を捕らえる。そして胸元からスペルカードを一枚取り出す。

「やれやれだのオ、始めからコレを使えばワシの勝ちで収まってるうに。」

「オオオオオオツ、吹き飛ばええエツ!!!」

強大な熱量のあまりにも、近づくだけでも溶けてしまいかもしれない。

しかし、それだと言うのにも関わらず、自来也はカードを一枚。印を結び、妹紅に対し今回初めてになるスペルカードを発動する。

「封印術『封火法印』」

自来也のスペルカードで、妹紅の炎が瞬く間に消失して行く。

妹紅の放つ禍々しい炎も、過剰なまでに放たれて周囲に飛び散った炎も全て消失する。

「な、なん…だと…?」

自分の身に起きた異変に気付いた妹紅が突撃を…止める筈もなく、新たな炎を生み出そうと

妖力を込めつつも突撃の手は緩めない。

しかし、何度力を込めても炎は放たれない。

それでも諦めない妹紅。妖術が駄目ならば体術だ、と言わんばかりに自来也に向けて攻勢に出る。

「フンッ……あっ——」

妹紅が繰り出したストレートパンチを軽々と避け、それを逆手に関節を決める自来也。

忍者たる者、体術にも秀でてなければならぬものである。

それも伝説の三忍と謳われた自来也相手に接近戦に転じるとなれば、余程の達人でなければ打ち勝てぬだろう。

「まだやるんかのオ？妹紅」

優しくも表情を引き締めた自来也が妹紅に語りかける。

「そこまでだ自来也。スペルカードを使い切った妹紅の負けだ。」

そう審判である慧音が告げると、自来也は妹紅の関節技を解く。

疲労と自らの異変に思わず倒れる妹紅。意識は残っているようだが、疲れ果ててしまったのだろうか。

「強いオ、妹紅は。ワシの中ではカードを使わずとも勝てると踏んでおったんじゃが」

「確かに妹紅は相当の手練だが、自来也君もそれを圧倒する強さを持っているとはな……」

「はっはっは、何。漢自来也、伊達に修羅場を乗り越えてきてはお

らんよ！」

「ならば大判振舞って女遊びなどせず、女の一人や二人捕まえて地を固めるんだな」

「むう…、返す言葉もないとはのお…」

決闘を自来也の勝利で終え、談笑していた自来也と慧音。妹紅は相変わらず地面にぶっ倒れたままであった。

「そういえば、何故妹紅の炎が突然消えたんだ？」

慧音が自来也に質問した。

「うん…、何であそこで消えちゃったんだろう。妖力もまだまだ溢れてたのに…」

妹紅も落胆したかのようにそう呟いた。

「なあに、簡単な事じゃ。——”封印”したからの。」

「…え？」

「なん、ですって…？」

「聞けば妹紅は炎の力を扱うと聞いてな。ならばと思い、ワシの封印術で…」

自来也が説明してる途中で妹紅が切り出す。

「封印”って…どういう事？」

「その名の通り、”封印”じゃ。とは言っても、火に関する能力だけじゃからの。」

その他に関する妖術は扱えるはずだがのオ」

言うや否や、妹紅が手を広げる。

「ふーん…、えいッ！」

そして妹紅の掌から妖力でできた弾幕が放たれた。

それは綺麗に自来也の顔面に衝突し、思わず後ろ向きに倒れる自来也。

「あ、本当だ」

「うおおい！いきなり何するんじゃ妹紅！」

「だが、”封印”ということは解除しなければならないのだろう？術者のお前が解除の仕方が分からないってオチはないよな？」

「ああ、勿論解除の仕方は熟知しておるぞ」

「ならすぐに解いて——」

妹紅が自来也に解除するよう要求するが…

「あー、先程の攻撃で解印の仕方を忘れてしもーたのオ…」

フラフラと動きながら、猿芝居を始める自来也。

「だったらまた思い出させてあげないとね」

猿芝居と一瞬で理解した妹紅は、自来也に向けて弾幕を放つ。

すると自来也に命中するや否や、自来也の姿が白煙と供に消え去った。

「ほう、これが自来也君の言っていた影分身の術か。」

うむ、と感嘆の声をあげる慧音を尻目に、封印を解除できる術者が行方不明になり慌てる妹紅。

「ちょっと！あいつが消えたら私一生炎が出せないってこと！？」

「そういう事になるだろうな」

慌てる妹紅に冷静な慧音。

「それにしても妹紅、その顔……」

何かを思い出したように妹紅の顔を改めて見直す慧音。

そして笑い崩れる慧音。

妹紅も怒りの理由を思い出し、思わず赤面。よりも自来也に対する憤怒の思いのほうが強かったようだ。

自来也、許すまじ。と意気込み搜索を開始しようとするが…。

「くっ…この顔で人里には行けない…」

羞恥心よりも憎しみ、それよりも体裁を気にする妹紅であったとさ。

——つつく？

もこたんINしたお！（後書き）

つづくの？ 続いちゃっていいの？？^ p^

B B A インしたお！（前書き）

今回はご都合主義すぎたかもしれない。
境界って凄いんだよね？…え？

B B A インしたお！

妹紅との決闘を勝利で収めた自来也。

その後にもう一波乱あったようだ、余談である。

妹紅に施した封印術もしっかりと解除し、これで完全に決闘の件は終わりだ。

一部、顔面にアートを描かれたものが納得しないようだが、これも余談である。

自来也にとっては丁度良い暇つぶしだった決闘から数日後の話。いつも通りの生活に若干の退屈を覚え始めた頃。

今日は自来也邸に思いもよらぬ人物が訪れたのである。

「御機嫌よう、仙人さん」

それは自来也が今日の糧を収穫し、住処に戻った時の出来事である。戻るなり、金髪の女性が自分を出迎えているではないか。

自来也からすれば、綺麗な女性は大歓迎だが、この女性から感じられる胡散臭い雰囲気それを否定する。

如何してか、”仙人”と呼ばれた自来也。

自身もこれに対し大層疑問を抱いた。

「いやはや。口寄せの出来ぬ今では仙人と呼ばれても、ただこそばゆいだけですじゃのオ」

若干の皮肉を込めてそう返すのは、自らの事を”仙人”と呼ぶ辺り、何か前の世界の事を知っているのだろう。

と、自来也自身の期待も込められた発言である。

「口寄せ、ねえ」

金髪の、どこか胡散臭い女性がそう呟く。

「恐らく博霊の結界が原因でしょうね。」

「ほう、何か知っておるようじゃのオ。……」

「紫よ、お・じ・様。八雲、紫。」

「紫さんとやら、何か知っているのであれば簡潔に頼むぞ。回りくどいのは苦手での」

八雲紫の存在を無視するかのように、今日の収穫分を運び込む自来也。

そうして暫くすればそれも終わり、自来也も紫同様席に着く。

「知ってるも何も、私は何も知らないわ。」

紫の予想外の解に、呆気にとられる自来也。

「でも、そうね。私の能力を使えばまた口寄せとやらが使用できるようになるわよ?」

紫の言葉に自来也が待ったをかける。

「そうして貰えるのはありがたいがの、そんな事してお主に利があると思えんが。」

「利ならあるわよ?」

そう言い、一瞬の静寂の後、紫が口を開く。

「そのほうが面白そうじゃない?」

結論から言えば、口寄せの術を使用する事ができるようになったそうだ。

実際にはまだ試していないので不明だが。

どうやら八雲紫の能力を介し、博霊の結界を——という、自来也には理解し難い内容であった。

その結界とやらが、外部からの干渉を全て防いでいたようだ。

口寄せの術も一種の時空間忍術なのである。

八雲紫は他にも目的があつたそうだが、「今回はコレだけ」とだけ言い残し何も無い空間から姿を消した。

恐らくは彼女のいう”能力”という奴だろう、と自来也は考えた。他にも彼女から言われた事といえは

「外来人って、幻想郷に降り立つと同時に何かしらの”能力”が宿る事も

あるみたいだけど…。貴方はどうなのかしらね?」

八雲紫が自来也邸を後にした後も、その事について暫く考えた。しかし、考えども何も浮かばない。

自来也の性格が性格だけに、能力に頼ろうという考えも薄かったよ

うであり、
不利益になるようなモノでなければ、そのうち自然と理解できるだろう、という事で考えるのをやめた。

八雲紫訪問から数日、試しに口寄せを行おうと考えた自来也はすぐ
に行動に出る。

自来也の住処は里外れなので、口寄せの術を行おうとも目撃する者
はいないだろう。

勿論、超級の口寄せじゃないのが条件であるが。

契約の巻物を地に広げ、自らの血液で名を刻む。

「口寄せの術！」

自来也が掛け声と共に、大地に手を当てると白煙と共に現れる蛙が
一匹。

口寄せにより召還されたのは、ガマ吉であつた。

「……つつう、誰だよいきなり呼んだ奴あ！……って」

「つてお前か」

感動の再開、というわけでもなかった。

自来也からすれば口寄せしようとした目的のものとは違うのが口寄
せされ、

ガマ吉からすると、目の前にいるのがどこかで見たかのような人物
であつたからだ。

「誰だ、おめえ？」

ガマ吉の抱いた疑問に自来也が答える。

「やれやれ、ワシを忘れるとはのオ…まったく、歳は取るもんじゃないの」

「あん？その喋り方は…自来也か！おいおい、どうしたってんだよ。そんな小便臭えガキじゃなかっただろ？…というかおめえ、確かペインに…」

「おうおう、そんな事もあったのオ。何の因果が知らんが、ワシはまだ生きておる。まったく、因果な運命よのオ」

「そ、そうだ！こうしちゃいらねえ！」

言うや否や、ガマ吉が白煙と供に姿を消した。

恐らく妙木山に住む他の蝦蟇達に報告にでもいったのであろう。

それを察した自来也が溜息を一つ。どうやら、肉体は若返っても精神は老人のままのようであった。

そんなこんなで、口寄せの術が使用可能(?)になった自来也であったのだ。

そこから暫く、夏の暑さが過ぎ去り、秋の風が吹き始めた頃の出来事である。

外に出るたびに感じる、涼しさを通り越した体温の変化。

そんなある日の出来事、いつも通りに生きる糧を探す為に外出する自来也。

冬になれば自然の恵みも受け難くなる為に、熊などの動物達のように自然の恩恵を

受けられる今のうちに食料を集めておこう、という魂胆であった。

「む、なんじゃコレは…？」

自来也が外に出るなりその一言。
眼前に広がるは、辺り一面の紅霧。

「何とも薄気味悪いのオ」

自来也の抱いた感想はその一言。
寒さによる霧も珍しいものではなかったのだが、紅い色の霧は初めてだ。

この土地ではそういう事もあるのであろう、と今は自己完結していた。

自来也が再び紅霧を意識し始めたのはそう遠い事ではなかった。
ある時人里へと赴くと、そこには人っ子一人いなかった。

そして自来也の済む土地よりも遥かに濃度が濃い紅霧に覆われていたのだ。

「こりゃひどいのオ」

口から出るのはその一言。
濃い紅霧もさる事ながら、普段なら大賑わいの人里の市場には人っ子どころか
犬猫などの小動物すら見かけない。当然ながら開店してる店など一軒もなかった。
そんな時こそ、困った時の大先生。という訳でもないが、慧音ならば何かしら事情を知っているかもしれない。と自来也は考え、寺子屋へと足を運ぶのであった。

「む、自来也君か！」

寺子屋へと向かう途中に、目的の人物と遭遇した自来也。

「先生か、これは丁度良い！」

「見ての通り酷い瘴気だ。里民に外出しないよう呼びかけていたところだ。」

「紅い霧の正体は瘴気か……」

自来也がそう呟くが、慧音が私の推測だがな、と付け加えた。

「自来也君は体調に異変を来していないようだな」

慧音の問いかけに自来也が頷く。

「そついう先生も大丈夫そうじゃのオ」

「ああ、恐らくは私の妖力が瘴気を中和しているのかもしれない…」

妖力、等と言った単語は理解できるし、言葉の意味もわかる。

しかし、自来也に流れてるのは妖力や霊力ではなくチャクラなのだ。慧音同様に体調が無事なのは、チャクラもそういった類の仲間だからか、と推測する自来也。

「それにしても、どうして瘴気が突然降りてきたんかのオ…」

「わからんな…」

里民に呼びかけ運動をしていた慧音が、若干を息を切らしつつもそう受け答える。

「だが、怪しい根源と見られる建物があるのは確かだ。」

慧音が放ったその言葉に、自来也が耳を傾ける。

「ここから湿地帯を抜け、魔法の森と呼ばれるところの先にある湖に、真赤な洋館がある。」

ほオ、と自来也。

魔法の森と言えば、初めて降り立った場所であり、自来也にとっては苦い思い出のある森だ。

「私の推測だが、恐らくはあの洋館を中心に紅霧が広がっていると考えられる。」

自来也の住処はまだ紅霧が薄かったが、人里の中心に行くにつれて、つまり紅い洋館に

近づくにつれて霧が濃くなっているとの事だ。

「事実、森に近づくにつれて瘴気が強くなっているからな」

判断できる材料が少ないので、自来也としてもその言葉を信用するしかない。

「して、その口ぶりから察するに、何か面倒な事を任される気がしてならないんじゃないか」

自来也が面倒臭そうに、そして溜息も混ぜながらそう一言。

「ふふっ、もう私の事を理解してきているようだな。——君にはこの異変を解決してもらいたい。」

——君には異変を解決してもらいたい

その一言が引き金となった。

慧音はあの後、瘴気にやられ倒れている人間はいないかの搜索と供に、

瘴気が原因で凶暴化している妖怪の警戒の為に、妹紅と共に里の警戒に当たるそうだ。

その妹紅は妹紅で、自来也が慧音と話している間はグッスリだったそうだ。

慧音も、どうせ起きたら此方へ来るだろう。と、大して期待はしていない様子だ。

「さて、紅い洋館に潜入するのでしょうか！」

といっても、まだ魔法の森の入り口付近にいる自来也。

潜入すると言っても、何の当てもないスニーキング・ミッション。と考えると少々ズレが生じてしまうが。

自来也の職業柄、正々堂々正面突破よりかは、潜入という形で遂行するのがやり易いスタイルなのだ。

今回の異変解決で、自来也が考えてるネツクな部分と言えば魔法の森である。

幸いにも、現在は太陽の光にも恵まれている時間帯なので、木々を高度で跳躍すれば抜けられない事もない。

が、ぐずぐずしているとあつという間に太陽が沈んでしまう季節でもあるので、油断は禁物である。

気合をいれ、魔法の森へと入る自来也。

無論、地上からではなく大よそ上空から。

木と木の間を跳躍し、一般の人間から見れば高速移動のようにも見える速さ。

暫く跳躍を繰り返し、魔法の森も半分超えたところだろうと思われる距離に達した時である。

「ッ！！」

自来也が跳躍する為に足場にした木が謎の攻撃により悲鳴を上げ、倒れた。

木々が倒れた方向とは反対の方向へと振り向く自来也。

木の倒れる方向で敵がどの位置から攻撃を仕掛けたのかが何となく把握できる。

「おっ、避けやがったな！んじゃもう一発……」

敵がそう言つと、星型の弾幕が自来也を襲う。

リズムカルに飛んでくる弾幕をバックステップで避ける自来也。

「くッ、何奴だッ！」

自来也がそう言つのと、敵が口を開くのは同時であった。

「はぁ、じゃあ私は先に行くわよ」

「おう！ここは私に任せとけ！」

どうやら敵は二人一組のようだが、一人が先に行くと言っている辺り敵は目の前の特徴的な黒い帽子を被り、箒を持った金髪の少女のようだ。

「……外来人が来て早々異変を起こすわけじゃない……」

「こーいうのは戦う事に意味があんだよ！」

「そ、なら満身創痍にならない程度にね、魔理沙。」

巫女姿の少女が言うや否や飛び立つ。

その場に残ったのは、派手目な着物を纏った銀髪の男と、魔法使いの格好をした金髪の少女のみであった。

「何をする、小娘！」

自来也が覇気を込めてそう白黒の魔法使いに言い放つ。

「どーしたもこーしたも、この紅い霧、お前の仕業だろ！」

どうやらこの白黒娘、今回の異変を自来也が起こしたものだと思っているのだろうか。

或いは、怪しい奴は全て叩く、という破天荒なだけか。

「私の名は霧雨魔理沙だ！光の魔法で異変の元凶を打ち滅ぼすぜ！」

バーン、とポーズを取る霧雨魔理沙と名乗る少女。

その様を見届けた自来也は、この娘は阿呆の子か。と一人思うのであった。

「そんな事はどうでも良いのオ、生憎阿呆に名乗る名は持ち合わせ
ておらんでな」

「なんだとオ!?」

自来也の挑発に簡単に乗る魔理沙。

「ワシは急いでおるんでな、小娘との御飯事に付き合ってる暇はない!」

言葉と共に素早く印を結ぶ自来也。

「風遁・大突破ッ!!」

印を結び、頬を僅かに膨らませる。

掛け声と共に吐き出されるは、正面から食らえば呼吸をするのも難しくなる程の強風。

自来也の吐息をチャクラで増幅させ、それを相手に向けてぶつける
中級忍術。

しかし、華奢な身体の少女がそれをまともに食らえばどうなるかは
想像するに容易い。

魔理沙は強風に耐え切れず、思わず吹き飛ぶ。

空を飛べるという事で、吹き飛んだ際に箒に跨ることですのダメー
ジを軽減できたのが幸いか。

「ちっ、変わった攻撃をするじゃあないか…。」

箒に跨り体勢を整えた魔理沙。

吹き飛んだ事で自来也を見失った魔理沙が、再び敵を捕捉しようと
眼球を動かす。

時間にしてほんの数瞬であったが、歴戦の英雄を相手にその数瞬は

あまりにも大きかった。

「——しまッ!!」

反撃に出ようとした魔理沙の眼前には巨大な水で模られた龍。自来也の放った水遁『水龍弾の術』が既に魔理沙を補足していたのだ。

自分の攻撃は間に合わない——と判断した魔理沙は攻撃の手を止めた。

変わりに、自ら作り出した魔法障壁により防御の体勢に入る。辛うじて間に合ったソレだが、ダメージがなくなるわけではない。いくら防御しているからといえ、水龍弾をモロに食らった魔理沙は堪らず吹き飛ぶ。

今度こそ地上に落下し、大地に抱擁をした魔理沙。

魔理沙は考えていた。

自分が思っていたよりもずっと疾く、重い攻撃。うつ伏せに倒れている今も、恐らく相手は此方に攻撃を始めているだろう、と。

ならば、このままうつ伏せに倒れているのは非常に拙い——

「ちっ…くしうッ!」

思わず上げる抵抗の声。

起き上がると同時に、懷から小さい八卦炉を取り出す魔理沙。彼女の敵である自来也に向け、大技を展開しようとする魔理沙だが…

「なッ…い、ない…だと?」

先程水龍が飛んできた方向を見直すも、そこには何もなかった。人間は勿論のこと、木々や雑草なども全てなくなっていた。

「こ、コレは……霧？」

魔理沙の眼前に広がるのは”真っ白な霧”。

異変で発生した”紅い霧”とは違う、真っ白な霧。

その濃度は、一寸先も染めてしまうほどであった。

目の前は勿論の事、足元すらも見るのが困難な程であった。

下手に動けば殺られる——そう考えた魔理沙は次の手を考えるのであった——

B B A インしたお！（後書き）

応援のメッセージを頂いたので、中途半端にやめるわけにもいかな
いだろう、と続いたよ！

パツチェさんインしたお！（前書き）

前回変なところで切ってしまった。

イコール今回は変なところから始まるよー

パッチェさんインしたお！

一方、自来也は既に戦地を後に、先へと進んでいた。

「やれやれ、ワシは幻術は苦手だが、知らぬ者にとってはアレも一種の幻術かのオ」

再び木々を跳躍しながらそう呟く自来也。

自来也が発動した術は幻術などではなく、「忍法『霧隠れの術』」である。

霧隠れの術とは、基本は濃霧を発生させてその中に紛れる術である。術者がチャクラを練りこめば練りこむ程に、その濃度を濃くし視界を限りなく零に近づける事も可能である。

あれが殺し合いならば、そのまま相手を討ち取る事も可能であった。

「面倒な小娘だったのオ、願わくばあのまま迷っていてほしいもんだが」

そう思いつつも、仕留めなかった辺りに自来也も考えるところがあったのだろう。

こうして、異変の元凶と勘違いされつつも、自ら異変の解決を再開する自来也であったとき。

魔理沙を何とかまいた自来也。

どうやら自分の他にも異変解決に乗り出している人物がいるようだ。その目的地も、先程飛び立った巫女装束の少女を見る限り、同じと推測できる。

そこから暫く跳躍を繰り返し、目的地との距離を縮める自来也。途中で雨が降り出すが、それでも気にせず跳躍を続ける。夕立だろうか、強い雨が降り出し視界も悪くなる。

——この辺りでも戦闘があつたのであろうか。

下を見ると、戦闘不能状態に陥り意識を失った妖精が何体か見受けられる。

察するに、先程の巫女と空中戦で敗北し落下したのであろうか。それらを足取りにし、巫女の向かった先に恐らく目的地があるのだろつ、向かう事にする。

大分先に進んだであろうか。

紅霧も濃くなり、そろそろ目的地に到着する頃であろうか。雨も強くなり、霧とも相成つて視界が悪い。

「ちよーつと待ったアー!!」

声と共に、自来也の前に何かが見えた。

季節が季節であり、太陽も沈み始めた頃だったので寒さも感じられる。

しかし、その声が聞こえた途端に更に気温が下がったのが分かる。

くるくると回りながら、氷のつぶてを撒き散らしながら自来也の前に立ちはだかる。

そして目の前で止まり、両手を広げる。

擬音で表すならば、まさに『バーン!!』という擬音が似合うで

あろう。

青い髪に小さな身体。

さながら氷の妖精とでも言うべきか、その姿は戦闘の後か、ボロボロであった。

「邪魔じゃッ！」

寒気がより一層高まったというわけであり、その元凶が目の前にいるのならば答えは一つしか出ない。

自来也の言葉と共に、目の前に灼熱の炎が吹き荒れた。

「ちょ——ッ！」

跳躍しながらの火遁忍術の前に、氷の妖精は為す術なく灼熱の炎に包まれた。——F i n

そうこうしているうちに、目的地付近に近づくことに成功した自来也。

どうやら先程の巫女と門番らしき人物が対峙しているようだ。

「ふむ、あの者らが戦闘に入った時に塀から侵入できそうじゃのオ」

いくら優秀な門番といえど、二人同時に館への侵入を防げるのは至難を極める。

シトシト、と強い雨が自来也の気配をより一層紛らわせてくれる。

暫くすると巫女と門番が戦闘を開始する。

行動に出ようとする自来也であったが、戦闘中の門番が何かに気付

いたかのように自来也のいたところを見る。
何もいなかった。

とは思われなかったようで、門番である女性が自来也のいた場所に向けて気弾を放つ。

「誰もいない…!？」

余裕などはなかった。

しかし、敵の侵入を防ぐのが門番の役割。

「戦闘中に余所見をするなんて、大した余裕ぶりね」

巫女装束の少女が門番へ向けて弾幕を放つ。

それは見事に門番に命中し、相手のアドバンテージを削る。

巫女——霊夢は考える。

戦闘中に、意味もなく何も無い場所に気弾を放つはずがない。

門番が攻撃を仕掛けた辺り、恐らく相手にとっての敵なのだろう。

魔理沙ならば、性格面も考えると派手に登場するであろう。

しかし、姿も見せずに門番から攻撃を貰うとなると、彼女である可能性は低い。

「（私を囿に使うなんて、良い度胸してるわね）」

霊夢は真っ先にそう思った。

自分をコケにされたと考えた霊夢にとって、それが誰なのかは関係ない。

敵が一人増えた、という程度であろう。

雨脚も強く、霧と相成って視界が悪い。

そんな状況でも、門番は自来也の存在を察知し迎撃を試みた。結果としては、門番の放った気弾は目標物には命中せず、大地を砕いた程度であつた。

紅い館——紅魔館の、まさに入り口付近で大地が隆起する。

巨大な現象ではなく、地中に眠っていた蛙が大地に顔を出す程度の小さな現象。

蝦蟇蛙が酸素を求め、地中から顔を出した。

顔を出すなり、口を開いて酸素を補給したのかと言えば、答えは”ノー”だ。

蝦蟇蛙の口から突如、手甲を嵌めた人間の腕が生えてくる。

それを合図に、胴体、頭と次々に蝦蟇蛙の口から人間が這い出てくる。

雨に濡れたのか、はたまた蝦蟇蛙の体液に塗れたのかわからないが、全身を塗らした男が出てきた。

「ふう、潜入成功だの…。意外に簡単にいったが…」

そう呟き、紅い館の全貌を見る。

真赤な館、常人が見れば薄気味悪いと思うだろう。

自来也もまた、同じような事を考えていた。

口寄せの術を使い、紅魔館内部に潜入する事ができた自来也。館の外観同様、内部も紅、紅、紅。

ここまで来ると見る者に不気味という感情を与えられる程である。

「思つとつたよりも広いのう…」

呟きつつも、影分身の術を使い複数人での探索を開始する。壁を伝い、地面を伝い、姿を隠しつつの行動である。

暫く歩くが、行けども行けども廊下が続く。

まるで誰かに空間を操られているかのような感覚に陥る。

「図書館、か」

歩いているうちに辿り着いた、大広間。

そこは整然と並ぶ本棚が数えるのも嫌になるほど並んでいた。自来也は本棚の一つに近づき、試しに一冊手に取ってみた。

暫く読み進めると、次、また次と本を変えて読んでいる自来也。そのうちにパタン、と閉じ

「ふむ、ワシのイチヤイチャシリーズと共感できるモノがあるのオ」
結構結構、と本棚に本を戻し、更にまた新しい本に手をつけようとする自来也。

「その本、持っていつちや駄目よ」

不意に声をかけられる。

その方向へと顔を向けると、一人の少女がいた。

紫色の髪をした、如何にも体調の悪そうな、所謂本の虫のような少女であった。

「この本の筆者は誰かのオ」

「さアね。どつかの偉い人なんじゃあないかしら」

「ワシのイチヤイチャシリーズと共感できるモノが感じられた。是非とも筆者とは一杯酌み交わしたいところだの」

思った事を素直に、敵地という事もあり若干の挑発を含めて言う。すると目の前の少女が手に持っていた本を開く。

「ええーと、目の前のインテリ助平を消極的にやつつける方法は…
つと」

捲る音だけでわかる、1ページが薄い紙でできているのであろう分厚い本。

それを何枚も捲り、先程自ら口にした問題を解決できるページを探している少女。

——載っておるのかのオ。と心の中で考える自来也。

興味があるようで、腕を組みながらその様を見届ける。

しかし、一考に見つかからないようであり、遂に少女が口を開く。

「うーん、最近目が悪くなったのかしらね」

と言い、目を開けたり閉じたり、まぶたを擦ったりと少女。

「そんな事より、お主がこここの主人かのオ？」

自来也の質問に、少女が答える。

「お嬢様に何の用？」

「別に用って程でもないのう、表の霧が濃すぎて、ちと頭が痛くなつてな。

ちーとばかり治療費のほうをせびりに行こうと思つてのオ」

ワハハと笑いつつも冗談めかしてそう伝える自来也。

「なら、お嬢様に会わせるわけにはいけないわね」

そう言い放つと同時に、細い腕を自来也の前に突き出し、更に指も真つ直ぐに伸ばす。

「私の名はパチュリー、パチュリー・ノーレッジ。冥土の土産に覚えておくといいわ」

指から放たれる魔法のレーザーが一直線に自来也を襲う。

それを避け、更に姿を眩ます自来也。

攻撃を避けたと同時に姿を消し、反撃に出ようというのだろう。突然消えた自来也にパチュリーと名乗る少女が一言。

「私に勝つたらメイドの土産になるわね」

そう呟き、手に持っている本を閉じるパチュリー。

そのまま静かに浮遊する。

辺りを見回し、敵を搜索する。

非力な魔法使いは、気配で敵を察知することができない。

その為、目視による搜索になるため、中々敵の居所が掴めない。

幸いにも、整然と並ぶ本棚のおかげもあり隠れ場所は少ない。

静かに燃える炎のランプがパチュリーを、本棚を、そして図書館全体を灯す。

パチュリーが気配を殺す真似事をし、静かに耳を傾ける。
聞こえるのは時計の針音、そして自らの鼓動のみである。

「見つからないわね。探すのも面倒臭い…」

そう言いつつ、自らの書斎へと戻ろうとするパチュリーに、自来也が攻勢に出る。

パチュリーの背後から二枚、三枚と手裏剣が飛んでゆく。

避けようともせず、それに気付いたパチュリーは立ち止まる。

「いたわね、”オータムエッジ”」

背後に迫る手裏剣を、後ろを向いたまま術を唱えそれを発動させる。
パチュリーの背後に、鉄の刃を精製し自来也へ向けて構える。

手裏剣は全て鉄の刃に命中。パチュリーへは一本も届かなかった。

そうして物凄い速さで鉄の刃が自来也へ向けて放たれる。

「——速い!!」

それを避けたと思えば、今度は火の玉が避けた場所へと放たれる。
隠れて奇襲しようとも、抜群の反射神経で全て迎撃したパチュリー。

遠距離で彼女と一戦を交えるのは、相当の実力がなければ命取りとなるであろう。

「それも避けるのね。ならコレはどう？」

言葉尻に、小さな声で”フォールスラッシャー”と呟くと同時に、地面から生成された大量の剣が上昇、更にパチュリーの背後にて自来也を補足して静止した。

自らに向けて発射されないのを訝しげな目でみる自来也。

「更に”ウィンターエレメント”」

追加詠唱で更に放たれる魔術。

自来也の足元から凶器となった水が襲い掛かる。

逸早くそれに気付いた自来也が跳躍し避ける。

「なんとッ!!」

感嘆の声をあげ、避ける自来也。

パチュリーの繰り出す魔術が、どこことなく忍術に似ている傾向にあるな、と自来也は思った。

跳躍する事により、パチュリーの放った”ウィンターエレメント”を避ける事に成功した。

「貴方は飛べないのかしら？」

そう言うパチュリー、その背後にて静止していた剣が空中に逃げた自来也目掛けて猛スピードで射出された。

対する自来也もクナイで対抗しようと懐から取り出し、構える。

そこでパチュリーが終了の合図を出す。

「浮遊できない貴方が跳躍した時点で私の勝ちは確定ね。」

言いながら一枚のカードを取り出すパチュリー。

「日符『ロイヤルフレア』」

パチュリーの頭上に太陽の輝きを思わせる火の玉が浮かび上がる。それと同時に大きく爆ぜ、火の玉を中心に物凄い熱量を持った光が図書館全域を襲う。

山火事を連想させるような、仰々しい音と共に一面を焼き払おうとするロイヤルフレア。

空中でパチュリーの攻撃を防ごうとしていた自来也も為す術なしと考えたのか、抵抗を止めた。

「人間って不便ね、空中では身動きが取れないんだもの。これでチエックメイトね」

一層光が強くなり、膨大な熱量で視界も取れない。普段は薄暗い図書館も、今回ばかりはと物凄い輝きに包まれた。

光が治まると、何事もなかったかのように本棚は無事。

本当に何もなかったかのように、本の一冊も燃えていない。

少々レンガで出来た通路が隆起を起こしている程度だ。

「ところで、彼は誰だったのかしら？」

その彼がいたであろう場所に残る”白煙”を見て、パチュリーが静かにそう呟いた。

パツチエさんインしたお！（後書き）

感想ありがとうー、返信してないけどちゃんと見てるよ！
指摘されるとあっという間に縮んじゃうよ！

V S 咲夜

「——むッ」

全てが紅い、悪趣味な作りの廊下を歩いていた自来也がふと口にする。

「ワシの分身を殺るとはのオ、大した小娘だ」

呟きつつも、消えてしまった影分身の記憶が入り込むのを感じ取る自来也。

どうやら分身が赴いた方面に館の主はいないようだ。勝ち負けよりも、そこが一番重要なのだ。

暫く歩き続けると目の前に一人の女性。

華奢な体型に、西洋風の従事服。

それを視認して自来也が感嘆した。

「まさに、冥土の土産になったのオ」

ガッハツハと笑いながらも、メイド服姿の女性との距離を縮める自来也。

「あら、お客様かしら？」

「お主はこの主人…ではなさそうじゃの」

「お嬢様に何か御用かしら」

「倒しに来ました、と言っても通してはくれんよなア…」

小さく呟いた自来也だったが、しっかりとメイド長に聞こえていたようだ。

「お嬢様は滅多な事でもない限り、人とは会わないわよ」

「ならばお主でも良い、あの鬱陶しい霧を何とかしとくれんかのオ」
ぶつきら棒にそう言い放つ自来也。

「そんなの、お嬢様に直接言いなさいよ」

この従者何なんだろうが、普通とは違うどこか忠誠心がないようにも伺える。

基本が面倒臭がりなのだろうか。

「ならば連れて来てくれ」

「自分の主人を危険な目に遭わせるとでも思ってるの?」

痺れを切らした自来也が言い放つ、回りくどいのは嫌いな性分なのであろう。

「最近の若いのは面倒臭いのう、ならばどうすれば良いのだ?」

「貴方も十分、若いじゃない」

このままでは埒が明かない、無理にでも口を割ってもらおう、と自

来也。

「ここで騒ぎの一つでも起こせば、主人自ら会いに来てくれるかもしれないのオ」

言うや否や、戦闘態勢に入る自来也。

対するメイド長も構える。

「貴方はお嬢様には会えないわ。何故なら、ここで再起不能になるから」

言葉と共に懷からナイフを取り出す。

その数は、右手に2本左手に2本の計4本。

「私は咲夜、十六夜咲夜。以後、お見知りおきを。」

両手でナイフを持った状態にも関わらず、親指と小指を器用に使い、スカートの端と端を摘み、お辞儀をする。

どのような状況でも礼を失さない態度、それこそがメイド長の鏡でもあるのだろっ。

それに習い自来也も名を名乗る。

「怒りに溢れた血の涙ア！三忍語りて仙人に！妙木山の蝦蟇妖怪！自来也様たア……」

無駄に長い台詞を読み上げながらも、振り付けは怠らない。しかし、その途中で咲夜と名乗る女性が攻勢に出る。

「のわアッ！……コラー！人が大見得切ってる時は黙って聞くもんじゃろオてー！」

「長いわ」

自来也の文句も虚しく、咲夜に一蹴されてしまった。

更に続けてナイフを投擲する咲夜。

バックステップで全て避ける自来也。

こういった”忍者っぽい”戦闘のほづが、自来也は得意なのだろう。

ナイフによる攻撃も収まり、再び戦況がリセットされた。

ふと、足元に落ちたナイフを手取る自来也。

そこからは、どこか余裕を持ち合わせた雰囲気を感じ取れる。

「刀幅が薄いのが、こんなので罅迫り合いでもしようものならばあつという間に折れるだろうのう」

自来也の言葉に、咲夜が自信に満ちた表情で答える。

「そうね、投擲用のナイフだもの。敵に再利用されない為にも刀身は薄く作つてあるのよ。」

そう言いながらも、どこから取り出したのか不明なナイフを一つ手に取り、指の力だけで折つて見せた。

「私つて頭良いでしょう？」

ドヤ顔でそう自来也に訊ねる咲夜。

自来也からは何とも言えない空気が流れ出したが、気にしない。

「さあのお。だがソレのおかげでワシも有利に動けるといふものだ！」

手にしたナイフを軽く放り上げ、素早く印を結ぶ自来也。

「風遁・烈風掌!!」

空中に舞った薄っぺらい刀身のナイフが、強風に煽られぶっ飛んでゆく。

物凄い風と共に、咲夜目掛けて何本かナイフが飛んでゆく。

しかし咲夜は動じずに、試しにナイフを投擲してみせる。

それは見事に自来也に届かず、咲夜の後ろへとぶっ飛んでいった。

「いつまで続くのかしら、それ」

まるで何事もなかったかのように自来也に訊ねる。

「ワシが止めようと思った時じゃのオ」

そう言いつつ、術を止める。

自来也は考えた。

こういった変な余裕を持っている輩は、何かしらの”とっておき”を持っている。

此方の油断を誘っておるのかもしれないのオ

思考を巡らせているうちに咲夜が攻勢に出る。

「その程度の風じゃあ、私のナイフは防げないわよ」

言葉と共にナイフを投げる。

「——ッ!!」

刹那、物凄いスピードで此方へと向かってきた。

咄嗟に回避行動に出た自来也の頭一つ分横にナイフが通り抜けた。

「大した小娘が多いのオ、この館には。」

自来也と咲夜が戦闘に入る。

今までの遠距離タイプの際とは大きくかけ離れ、近接でもかなりの実力を持っているようだ。

ナイフによる攻撃の後、すぐに距離を詰めてきた咲夜。
お次は体術だ、と言わんばかりに攻撃を繰り返してくる。

華奢な身体からは想像もできない速い拳が飛んでくる。
そして華奢な身体ならではの、テクニカルな拳も同時に。

「やりおるのオ」

咲夜の拳を、蹴りをひたすらに交わし続ける自来也。
しかし、何度放つてもその拳は自来也に命中しない。

「ちっ…いい加減、当たりなさいよっ！」

咲夜の放つ肘鉄を軽く頭を沈める程度で避け、続く真横からのミドルキックを受け止める自来也。

「……ッ!!」

組み合ってから初めて攻撃が当たった、という感情と共に、それに

まったく

言っていない程に動じない自来也。

それに些かの危機感感じた咲夜は、急いで足を引き戻そうとするが時既に遅し。

自来也によつて掴まれた咲夜の足。

まるで中身の詰まっていない人形のように、軽々しく投げ飛ばされた。

「火遁『炎弾』」

仰々しい、燃え盛る炎の音ともに自来也の口から炎が放たれた。吹き飛ばされた咲夜は、受身を取るが逃げられない――

――SIDE・咲夜

私の放った蹴りを軽々しく受け止めた、自来也と名乗る男。

私の足を掴み上げ、そのまま投げられた。

受身を取らなければ壁に激突だが、私は自来也から感じる物凄い熱気に気付いた。

「火遁『炎弾』」

小さく聞こえた言葉と共に放たれたそれは、一直線に私を襲う。

このままでは、受身をとれても炎に焼かれてしまう。

そう思った私は、一瞬、脳裏を過ぎった死の恐怖を拭い捨て、能力を発動した。

「幻世『ザ・ワールド』」

私がスペルカードを宣言すると、辺りの時間が静止する。発動までに若干の時間がかかり、少し火傷を負ってしまったが戦闘には支障はないだろう。

いくらか時間が止まったとはいえ私自身の時間は動いているので、受身を取り壁を上手く利用して地面に着地する。

それだけで既に数秒要してしまっている。長時間の時間静止は、再使用を制限してしまう。

また、連続で時間を止める事ができない。最低でも息を整えるほどの時間が必要だろう。

なので、必然的に攻撃よりも防御の時に使う事が多い。

時間を止め、更に態勢を整え自来也のいる方向を見据える。

——これ以上の時間停止は負担が大きくなるだけだろう。

そう判断した私は再び時間を動かした。

——SIDE・咲夜 OUT

仕留めた。

そう思えるほど綺麗な、流れるような攻撃が咲夜に入った。

自来也の放った炎弾が壁に衝突し、それを喰らい尽くそうとする。

「…はあ、思っていたよりも強いよね」

燃え盛る炎を尻目に、咲夜がそう自来也に言い放つ。

涼しい顔だが、額には大粒の汗を流しているのが分かる。

——速い

自来也は思った。

あの状況からの脱出は、ちょっと身体能力が優れている程度の人間では不可能だと考えていた。

それが目の前には多少の火傷程度で済んでいる女性が一人。

「何かしら仕掛けがあるのだろう。まずは仕掛けを暴くところじゃないのオ」

「――ふう。もう、不用意に近づかないわ」

息を整えた咲夜が呟く。

そして再びナイフを投擲する。

2本、3本と自来也に向け投擲。

自来也がそれを叩き落すべく、クナイを構える。

「ちょっと靈力を込めるとね、面白い投擲ができるのよ」

「――ッ！」

直前にナイフの速度が上がる。

しかし、上手くそれを捉えた自来也が避け、クナイで相殺する。

再び咲夜に意識を向ける頃には、既に咲夜は別の攻撃を仕掛けていた。

「靈力つちゅーのは奇天烈なもんなんだのオ……」

その光景に思わず感嘆の声をあげる自来也。

「あら、貴方もその膨大な靈力で何かできないのかしら？」

次々にナイフを投擲する咲夜。

方向は自来也とは正反対。

初めは、あさつての方向に投げて如何するのだろうか、と思っていた自来也も

兆弾の要領でナイフが壁を”バウンド”しているのが分かる。

「体術は貴方のほうが上。なら距離をとれば…」

そう呟きながらも次々にナイフを抛る咲夜。

壁を伝い、ナイフが自来也に向けて襲い掛かる。

「確かに、コレは距離をとったほうが良さそうなのオ」

言うや否や、大きくバックステップ。

壁を背にし、後ろからの驚異を限りなく零にする自来也。

そうして素早く印を結び

「水遁・水乱波ッ!!」

自来也の口から放たれる多量の水。

それらは咲夜のいる地点に到達はせずとも、自来也目掛けて飛んでくるナイフを

無力化するには十分な威力であった。

「（やっぱりナイフは駄目か…）」

咲夜がそう思考を巡らせていると

「良いのかア？そんなところに居って！」

その自来也の一言に思わず身構える咲夜。

正面からは何も無い、横か、上か、それとも後ろからか？
咲夜が視線を動かし、自身に襲い掛かる驚異を探す。

「なッ——」

突如足元が不安定になり、身を崩しかける咲夜。
足場が歪み、溶け、まるで底無しの沼になったかのように歪み始めた。

勝ったか、そう思った自来也がまたしても感嘆した。

「ほオ、やはり何か仕掛けがあるみたいじゃのオ」

「ハア…、…ふう。そうね、とっておきがあるのよ」

額に嫌な汗を流す咲夜がそう冷静に言い放つ。
先程まで、自来也の発動した黄泉沼に浸かりかかっていた咲夜だが、
気がつく

黄泉沼から離れた場所に位置していた。

またしても咲夜が時間を操ったようだが、自来也はそれを知らない。

中々面白い術を使うみたいだのオ、この小娘。

特徴を見る限り、瞬間移動してる辺り時空間忍術のようなものの。
そう考えを巡らせる自来也。

「時符『イマジナリバーチカルタイム』」

自来也が思考を巡らせているうちに、咲夜が次の攻勢に転じる。

言葉と同時に、自来也の視界には大量のナイフ。
気付いたら空中に静止していたナイフが、綺麗な弾幕となって自来也を襲った。

「ちィ、やはり速いのォ！」

クナイや手裏剣を上手く使い、真っ直ぐに飛んでくるナイフを避け、相殺する。

単純に飛んでくるナイフは自来也にとっても打ち落とすのは容易であつた。

自来也がナイフを打ち落としている間に、咲夜が膝をつく。
息を切らし、額には嫌な汗。誰がどうみても体調が悪そうに見える。
全てのナイフを叩き落した自来也が咲夜のほうを見据える。

「なんだ、もう降参かのう。思っておったよりも体力が続かないみたいだのォ」

そう言い、自来也がゆっくりと咲夜に近づく。

「ええ、…そうね。ハァ……ふう、もう続かないわ。」

対する咲夜もゆっくりとした動作で立ち上がる。

そして一言

「終わりね、…私の勝利だね」

咲夜の言葉と同時に、自来也が背後への違和感に気がついた。
先程投げたナイフの一本が兆弾し、まだ生き残っていたのだ。
これは、咲夜が能力を使い操っていたとおきの一本。

ナイフが自来也の背に刺さり、その体勢を崩した。

「——やった、もう一本ッ！」

完全に立ち上がった咲夜が、懷から取り出したナイフを全力で投げる。

能力も同時に併用し、肉眼では捉えきれない程のスピードである。

——しかし、その一本は自来也へは届かない。

始めの一本が刺さった時点で、自来也は白煙と共に姿を消してしまっただから。

「なッ…これは……！！」

白煙と共に消えた自来也を見て咲夜が考えた。

昔、書物で読んだことがある。忍者という人物を。

変わり身や、変身の術を使い相手を惑わす隠密部隊。

「これが、変わり身…？」

辺りを見回し、行方を眩ませた自来也を探す咲夜。

この屋敷の中で隠れられるところは少ない。天井にでも張り付いているのだろうか、と

上を見てみるがそこには何もない。

また下か、と思い警戒してみるが何もない。

疲労の為、あまり大きな動きをしたくない咲夜はその場で敵を搜索する。

「——ぐッ、また”下”！？」

咲夜の足に何かに掴まれる違和感。
それに気がつきすぐに時間を止める。

「さながら、時空間移動をする能力といったところなのかのオ」

またしても時間を止め、回避行動を取った咲夜に対しそう呟く。
咲夜はもう喋る気も起きない、と言わんばかりに壁に凭れかかっていた。

暫くすると、咲夜がまたしても攻勢に出る。

これが最後、といった雰囲気漂う、ゆっくりとした動作でスペルカードを宣言する。

「時符『プライベートスクウェア』」

宣言と同時に、周りの空間が歪み始める。

何かが起きた、と思った自来也が行動に移る。しかし…

「ぬう、身体が…コレは……」

咲夜の発動したスペルカードの効力で、時間がスローになる。術者を除いて。

「ふう……はあ、もう無理、限界ね。コレで蹴りをつけるわ」

極限の疲労の中でも、獲物を仕留めようとする咲夜。

壁伝いに、ナイフを手にゆっくりと近づく咲夜。

自来也は試しに手裏剣を投げてみるも、全ての時間が遅延しているようで、咲夜には届かない。

一步、また一步と壁を支えに自来也に近づく咲夜。

そうして咲夜がナイフを持った腕を伸ばすと、ナイフの先端が自来也の喉元に届く距離となり――

「――え？」

咲夜が思わず戸惑う。

視界に広がっているはずの、紅い内装の紅魔館。

主の趣味で紅くできるものは全て赤い紅魔館。

それが突然不気味なピンク色の、まるで動物の体内にいるかのような錯覚に陥ったのだ。

「お、術が解けたのう。」

術が解ける頃には、完全に自来也の支配する空間に変わっていた。

一方の咲夜といえば、四肢を完全に拘束されていた。

「コレは…一体…、私は、…どこにいるの？」

完全に混乱している咲夜に自来也が説明する。

「なに、ちょっとした仕掛けをしといたんじゃよ。ここは蛙の腹の中。」

結界・蝦蟇瓢牢

口寄せした蝦蟇蛙の腹の中に咲夜を引きずり込んでいたのだ。

咲夜、というよりはこの空間自体を引きずり込んだといっても良い。このまま蛙の酸で溶かす事も可能だが、彼女にはまだ聞く事がある。

「それで、私をどうするつもり？」

危機的状況にも関わらず、クールな態度は変わらないメイド長。

「ワシの質問に答えてもらおうかのオ」

「嫌だと言ったら？」

「そうじゃのオ、お主にも蛙としての人生を歩ませてやろう」

「・・・」

そんな話をしている間に、騒ぎを聞きつけたのか妖精メイドが現れた。

「さ、咲夜様！」

現れるなり自分の主人の危機に気付くメイド妖精。
そして蝦蟇蛙の腹の中に入るなり

「いやー、ナニコレ気持ち悪いっ」

主人を助けようと勇んだが、その感触に思わず逃げ腰になっていた。
自来也は丁度良い、とメイド妖精に向き直る。

「忍法『蛙かえるの術』！」

「——え？」

自来也が妖精メイドに術をかけると、白煙と共に妖精メイドが変わり果てた姿になった。

「ゲロゲーロ」

そうして術の効力を見せ付けた自来也。
再び咲夜に向き直り、尋問を開始する。

「さて、霧の元凶の居所を「ここを真つ直ぐに進むと十字路になっている。」

そこを更に真つ直ぐに進むと紅い扉があるから、その奥にお嬢様はいらっしゃるわ。」「…」

少しの静寂の後、自来也が解かった、と肯定しこの場を後にする。
術も解き、満身創痍の咲夜は放っておく事にした。
そのまま紅魔館の主の下へと急ぐのであった。

――暫くすると

「んもっ、何なのよ一体」

門番を倒し、遅れて紅魔館に入った霊夢。

しかし、その道中は波乱に満ち溢れていた。

廊下を歩いているだけなのに、突如謎の強風に煽られ、その後大量の水が流れてきた。

膝下程度の量であったが、軽装の霊夢にとっては十分害悪になり得るものであった。

「強風に煽られるわ、水浸しになるわ…あー、足元が濡れて気持ち悪い」

歩く度にグチャリ、と布が水分を含み、圧力をかけられる不快な音になる。

「そして何よりも何なのよ、この臭いは」

洋風の館の匂いではない、何かが焼ける不快な臭い。そして煙である。息苦しいばかりであった。

そうしてずっと歩き続けると、ぐったりとしたメイド服の女性と、グロッキー状態に陥った蝦蟇蛙がいた。

「ゲロ…ゲロ……」

「なによ、邪魔な蛙ね」

「ゲコオーツ!？」

言葉と共に蛙を蹴り飛ばす霊夢、まさに外道。

「ちょっと、アンタ」

壁に凭れかかっているメイド長を揺さ振り、起こす。辛うじて目を開け、不快そうな表情で霊夢を見る咲夜。

「何、また侵入者?…これじゃあ掃除係も大変ね」

「それならアンタは掃除される側ね。そんな事よりも、ここで何があったのよ」

霊夢も面倒臭そうに対応する。

敗北した者に追撃するのはルールに反しているが、別に霊夢が戦っていたわけでもないの

このまま咲夜に更にお灸を据えるのは構わないのかもしれない。

「さあね、先に進めば分かるんじゃない？」

「アンタ、誰に負かされたのかしら」

咲夜が答えると、更に別の質問を問いかける霊夢

「もしかして、銀髪の背の高い男？」

霊夢があ那时的記憶を掘り返して咲夜に問う。

「私がさっきまで戦ってた相手の特徴も、それと酷似しているわね。」

咲夜の答えに、確信づいた霊夢が考える。

——へえ。魔理沙を負かしたんだ、あの男。

これは面白くなりそうだ、と考えていると咲夜から忠告される

「気をつけなさい、舐めてかかると蛙にされちゃうわよ？」

そうして指を指した方向には、先程霊夢に蹴られて意識を失った蝦蟇蛙が一匹。

「…忠告感謝するわ。それじゃ、アンタの主様はどこにいるのかしら？」

「貴女もお嬢様に用があるのかしら」

「ええ、外の鬱陶しい霧を何とかしろ、ってね。」

「それならお嬢様に直接言うといいわよ」

咲夜がまたか、と言った表情で霊夢の問いに答える。

「そうねえ、これ以上痛い目見なくなかったらご主人様の居所を教えてくださいんだけど？」

札を構えてそう咲夜に告げる霊夢。

「お嬢様の私室ならあつちよ」

指を指して霊夢に教える。

その先にも紅い廊下は続いていた。

「そつ、ありがとう。と言っても、前か後ろの二箇所しか道がないのに質問するのも不粋だったわね」

霊夢も、これ以上時間をとるなら自力で探したほうが早いだろう、とその後にする。

咲夜も空間を元に戻し、ほぼ一直線に歩けば目的地に着くように操作していたのを霊夢は知らない。

V S 咲夜（後書き）

予約投稿とか凄いね・・・。

とりあえずズバズバ物語が続いておりますが、閑話などを全て取り除いておりますので。

本当なら色々な話があるかもしれないけど、休み中に書いたほうがいいかなーと、本編だけ書き連ねた！間に合わなかった！

Vsレミリア（前書き）

平日と土日使って書き上げたどー

筆者はNARUTOもそんなに詳しくないうえに、原作も未プレイなので、細かな点には目を瞑っていただきたいです。
天則と幻少くらいですかね、東方は。

Vsレミリア

咲夜に言われたとおりに、ひたすらに全身する自来也。

行けども行けどもどこかで見たような光景に、本当にこの先に館の主の部屋があるのだろうか。

そう思い始めていた頃に、それは見えてきた。

真赤に染め上げられた、通りにある客室などとは一風変わった扉。誰がどう見ても、頭一つ偉い者の私室だな。と判断するだろう。

「中に居るのは一人、か」

紅色の扉を目の前に、確認するようにそう呟く自来也。

探知結界により、外部から内部の情報を探っていたのだ。忍びという職業柄、そういった類にぬかりは無い。

そしてその職業柄故、奇襲強襲といった行動を好むもの。

「蝦蟇油弾！」

紅色の扉の前に立ち、先制攻撃に出る自来也。

言葉と共に、自来也の口から大量の油が放出される。

その威力は、まるで水平方向から繰り出される滝のようでもある。

轟音と共に、紅色の扉が破壊される。物凄い水圧。否、油圧とでも言うべきか。

紅色の扉を木っ端微塵に破壊した後も、その油は衰えを知らない。

扉をも多い尽くす大量の油は、扉の先へと猛進する。

扉の先は想像するまでもないが、蝦蟇油により所々に水溜りならぬ

油溜りを作っているところであろつ。

「——ッ!？」

自来也の口から放出される蝦蟇油。

耳を劈くかのような轟音と共に放出されていたが、それも途中。

蝦蟇油弾を押し退け、紅色の神槍を連想させる弾幕が自来也目掛け放たれた。

紅の神槍は蝦蟇油を完全に威力で圧倒し、そのまま自来也へと命中した。

予想だにしなかった強襲に、自来也が驚愕の表情と共に消えた。

「へえ」

幼い少女の、か細い声が聞こえる。

声の主は如何にもな、館主が好んで座るような椅子に座っていた。

自らが放った一撃が、一瞬遅れて影分身だと気付いた館の主。

本体である自来也は既に扉の奥へと潜入していた。

無論、館の主もそれに気がついた。

「挨拶もなしに先制とは、良い度胸してるじゃない」

「ここいら一帯に濃霧を発生させておるお主も中々…」

舌戦に入る両者。

そこにある感情は恐怖でも畏怖でもない。喜びや悲しみでもない。互いにあるのは闘争心。否、自来也にそれがあるのかと言えば肯定はできない。

「私、病弱っ娘なのよ。日光とかも嫌いな」

「ふん、病弱娘が殺気を放つとも思えんがな」

「嘘じゃないわよ。ほら、肌とかも白いし。艶やかでしょ？」

「生憎、乳臭い餓鬼には興味がないんで」

幼き館主の戯言に、自来也が挑発の言葉と供に返す。

どこかカリスマ性の溢れる言動をとるのだが、それが背伸びをしている子供に見えるな。

と自来也は考えているのだろう

その言葉に、一瞬薄い青筋を浮かべた館主だが直ぐに冷静を取り戻す。

「貴方、人を殺すの慣れているでしょ」

話題を変える館主。

その言葉に自来也が面白そうに笑みを浮かべる。

「人外を殺めるのにはまだまだ慣れんがのオ」

「あら、この場に化け物がいるとでも？」

幼き館主が面白そうに、自来也に問いかける。

「少なくとも妖力を放つ人間など見た事がないがのう」

自来也の目の前にいる少女から溢れ出る妖力。そして殺気。

これだけでも人外を思わせるには十分すぎる要素であった。
自来也の言葉に館主がゆっくりと椅子から立ち上がった。

「ふふ、茶番ね」

「ようやく重い腰を上げる気になったか」

立ち上がるや否や、背中から生える翼を広げて宙に浮かぶ館主。
そういった異能な光景を目の当たりにしても、最早驚くことも飽きた自来也。

この幻想郷ではそれが常識なのである、と悟っているようにも伺えた。

ここから紅魔館の主、レミリア・スカーレットと自来也の対決が始まるのであった。

——レミリア・スカーレット

紅魔館の主人であり、吸血鬼。

永遠に紅い幼き月、濃霧の吸血鬼などといった二つ名を擁する。

その風貌からは想像も出来ないほどの年数を生きている。

容姿は少女だが、背中に生える巨大な蠅螂の翼を持つ為、相手に与える印象は様々。

彼女は少食で人から多量の血を吸えない為、吸血の際に吸い切れなかった血液を零してしまう。

そうして真赤に染まる彼女を”スカーレットデビル - 紅い悪魔 - ”

と呼ぶ者もいる。

好物はB型の血液であり、敵対する自来也の血液型がB型なのは偶然か、それとも運命か。

「そうだ、貴方スペルカードって知ってる？」

「ま、何となくはの」

レミリアの問いかけに言葉を濁す自来也。

幻想郷にきてからスペルカードルールを学んだものの、正式な決闘は妹紅との一件のみである。

道中の戦闘はみな、スペルカードルールとは名ばかりの攻防戦、若しくは自来也の一人舞台であつたからである。

そんな自来也の心境を知ってか知らずか、レミリアが一つ提案した。

「そう、なら話は早いわね。枚数は、そうね……5枚くらいで良いわ」

今日の私は機嫌が良いからね、と言葉尻に付け加えた。

提案するや否や、ルールなども全て自身で決めてしまふレミリア。自来也の意志など無関係のようである。

そして5枚くらい、と明確な枚数を量すレミリア。恐らく彼女なりの思惑が隠されているのであろう。

レミリアが自来也に向け小さなその腕を振るう。

すると小さな風切り音と共に、紅色の蝙蝠を模した弾幕が放たれた。まるで牽制だ、と言わんばかりのゆっくりとした速度で自来也へ向かう。

レミリアの弾幕を跳躍して避ける自来也。

だが、その弾幕は他の弾幕にはないとある性能を所持していた。

「ちィ、追尾かつ！」

真上に跳躍した自来也に対し、その軌道通りに同じく真上に向かう蝙蝠形の弾幕。

追尾してくると気付いた自来也は更に弾幕との距離を空ける。懐から三本、クナイを取り出し蝙蝠形の弾幕へ向け投擲する。

「ッ！…そんな物で打ち消すか！」

自来也の放ったクナイは蝙蝠の弾幕を相殺、どころか更にそれを打ち消し、レミリア目掛け猛進する。

ただのクナイかと思われたそれには、自来也の込めたチャクラが通っていたのだ。

「こんな物ッ！！」

語尾を強めたその一言と共に、自来也の放ったクナイを弾き飛ばす。

「天罰『スターオブダビデ』」

そして堂々としたスペルカード宣言。

レミリアを中心に六芒星を連想させる形状の弾幕が展開される。紅色のレーザーが屈折しながら自来也目掛けて襲い掛かる。

「土遁・土流壁！」

弾幕の間を抜けて避ける事も可能だが、自来也は忍術による防御法

を選択した。

自来也の口から大量の土流が流れ、目の前に土の壁を形成する。土流壁は見事にレミリアのスペルカード『スターオブダビデ』を防いでいた。

「（耐えられぬか…、徐々に削られとるのオ）」

土流壁の裏に潜み、機を窺っている自来也がそう考える。

レミリアの弾幕は徐々に、確実に土流壁を削っていたのだ。

クス、と微笑を浮かべるレミリア。

それを合図としたかのように、レミリアの弾幕が大きな変化をする。紅色の弾幕が直進、その後大きく”くの字”に屈折を遂げる。

「ちイ…」

土流壁の裏側にいた自来也を紅色の弾幕が左右から強襲した。

一瞬早く気付いた自来也は跳躍で避けるが、500年以上生き永らえる吸血鬼はそれを見逃さない。

「捉えた！」

デモンズディナーフォーク、と呟くとレミリアの小さな手に小振りの紅い槍が形成された。

小さな槍といえど、レミリアの体躯からすれば身の丈を超える十分な大きな紅い槍だ。

それを持ち腰から折る様に大きく振りかぶり、自来也に目掛けて投擲する。

「三本を同時に…！？」

レミリアの体軀からは想像もできない大きさの槍を三本同時に投擲したのを見て、自来也は驚愕した、予想だにしてなかった攻撃に、避けようと周りにはレミリアの弾幕『スターオブダビデ』。

「終わったわね」

案外あつけなかった、そう思いつつ自来也がどう切り返すかを期待視するレミリア。

——あの男がどう切り返すか、或いは切り返せるのか。敵に対する期待と好奇心、そして自らの闘争心に鼓動が早まる。

「（四方八方には私の展開した弾幕、そして正面には必殺の紅槍。例え逃れても致命傷は免れ——）」

レミリアが思考を巡らせている間に、突如異変が起きた。脳が、本能がこの場合は危険だ、と判断させる。ふと背後を振り返ったレミリアの視界には、爆炎。

「くっ……こ、コレは——!？」

素早くバックステップで避けるが、近距離での爆発に腕が、足が、胴体が爆破によるダメージを負う。

そして避けた先で待ち受けていたのは灼熱の炎。

その重度の被害に、思わずカードブレイク。

何故、——何故？思考を巡らせるが、理解できない。そして確かに解かる真実は一つ。

自来也による反撃だろう事。

自らの攻撃に嵌めてやったと思っていたレミリア。
しかしそれは見事に看破され、逆に自来也による反撃の痛手を負ってしまった。

「…そうか、最初のあいつの先制…あれは油だったか——」

一瞬考え、直ぐに思考の歯車が噛み合わさる。

流水かと思い、思わずレミリアの持つ大技で打ち消した。

今思えば臭いで気付くべきだった——そう思っている間にも、自来也の攻撃は続いていた。

「油断のし過ぎじゃないかのオ！」

自来也がそう言い思い切り息を吹きかけると、物凄い風圧で吐き出される。

蝦蟇油に引火した炎は当然、自来也をも飲み込もうとする。

それを防ぐ為に、目の前で燃え盛る炎に向け風遁・大突破を発動したのだ。

「ッ…炎が此方に…！？賢しい真似をッ！！」

中央で燃え盛る炎が、レミリアを目掛けて襲い掛かる。

炎が風力に押されて、そして一面に飛び散り、引火した油も共にレミリアを目指す。

対するレミリアもされるがままでは済まない。

怪我を負っていない腕を邪魔だ、と言わんばかりに乱暴に振るう。

「——ぐッ！？」

風遁・大突破を発動していた自来也の視界に一瞬、紅の輝きが物凄

い勢いで照り付けた。

思わず目を瞑り、術を止めた自来也。

再び視界を元に戻すと、地上に着地し怪我を負っている腕を押さえ、膝についているレミリア。

相変わらず中央付近は燃えたままだ。

「……ふう、迂闊だったわ。咲夜を退けただけの力はあるみたいね」

レミリアが立ち上がると、腕の傷は既に治りかけていた。

尋常ではない治癒能力に自来也の表情が歪み、やはり人間ではないな、と確信づいた。

先程の紅い輝きは、レミリアが妖力を一瞬爆発させ、炎を相殺させたのだ。

空間が一瞬歪んだかとも思わせたそれは、レミリアに秘められた力が膨大である事を教えてくれる。

「やはり人間ではないみたいだの、被爆した腕がもう治りかけておるな」

自来也自身もレミリアの治癒能力に気付き、相手に悟られぬようたじろいだ。

「そうよ、私は誇り高き吸血鬼。そして、人間の貴方にこんな事ができるかしら？」

自らの種族を明かし、堂々の攻撃宣言。

レミリアの言葉に、危険を察知した自来也はその場で身構える。

「呪詛『ブラド・ツエペシュの呪い』」

スペルカードを宣言すると、レミリアの姿がたちまち霧に変化する。敵を捕捉し難くなり、霧に変化したレミリアの見失わないように立ち回る自来也だが…

「くッ、攻撃が厚いのオ！」

レミリアのスペルカード『ブラド・ツエペシュの呪い』による弾幕が展開される。

所々に、紅い熱量を持った円形の弾幕が大量に放たれた。

しかしそれは自来也に到達する前に静止するが、相変わらず熱量を持続したまま。

どうやら追尾系の弾幕ではなく、相手の退路を徐々に立つのが目的なのだろう、と自来也は考えた。

事実、跳躍で避けた先にもレミリアの弾幕が展開されており、徐々に退路がなくなっていく。

「こうなりや自棄じゃのう、一か八か試してみるのも吉だ！」

自来也は相手が吸血鬼という事で、言い伝えどおりの吸血鬼ならば、と考え術を発動する。

「水遁『水陣壁』」

如何に高速で印を結べるといえど、今の状況ではそれも間に合わない。

ならばと、スペルカードとして水遁忍術を発動する。

「——ッ！！？」

自来也を中心に大量の水が、水飛沫を上げながら発生する。

逸早くそれに気付いたレミリアが霧化を解き、その姿を現した。

一方、水陣壁によりレミリアの弾幕を大きく防ぐ事ができたが、それでも数発被弾してしまった。

そして自来也のスペルカードはそう長く続くものでもない。

いや、続けられるが自分が身動きを取る事ができないので、状況に合わせて切り替えを

行わなければ逆に此方が不利になってしまう。その為、役目を果たした水陣壁を解いた。

「やはりのう、吸血鬼は水に弱いみたいだな」

燃え盛っていた室内がいつの間にか鎮火しており、両者の攻防により見るも無残な光景に変わってしまった。

室内は炎を消化した事による黒っぽい煙が上がり、静寂が辺りを支配する。

自身の弱点を察知し、直ぐに回避行動を取ったレミリアの姿はなかった。

室内を見渡し、レミリアを探す自来也。

焼け焦げ、もう使い物にならない机や椅子。湿り気を帯びながらも煙を吐き出す木材になったもの。

そして上を見上げると、ナニカが力任せに突破したであろう穴が空いていた。

「天井を突き抜けて逃げおったな」

そう判断するや、逃さない。と言わんばかりにその行方を追う自来也。

レミリアの作り出した穴から自身も紅魔館の外へと移動する。

紅魔館の外に出ると、辺り一面は既に真夜中であつた。

屋根の上にいるのはレミリアと自来也の二人だけだ。

レミリアは自来也に背を向けていたが、自来也がその隙を突いて攻撃する事は無かつた。

「スペルカードの使用枚数は私が二枚に、貴方が一枚と言つたところね」

このままじゃあ私、負けちゃうわね。と小さく呟くレミリア。自来也はただそれに耳を傾けるのみである。

「スペルカードを使い切る前に貴方を再起不能に…殺しちゃえば私の勝ちよね？」

そう振り向き様に自来也に問いかけるレミリア。

その眼は普段のものと違い、血の気を帯びているのが解かる。

「お主にワシを殺せるのならなッ！」

レミリアの戯言に少々怒気を含ませながら言い放ち、攻勢に出る。

一直線にレミリアへと突撃する自来也。

恐らく接近戦による攻撃展開を広げるのだろう。

対するレミリアはそれに動じない。背後には紅い月が控えていた。

上半身を折り、少しでも風の抵抗を抑える忍者独特の走り方。何とか眼で追える速度でレミリアへと向け猛進する。

そして自来也とレミリアが衝突する刹那――

「ハアッ！」

突進する自来也にカウンターの要領で蹴りを繰り出すレミリア。

一方の自来也はそれを読んでいたかのように、身を擦らせ避ける。

レミリアは素手だが、自来也はクナイを逆手に用いての体術戦だ。次々に繰り出されるレミリアの拳、蹴り、そして大振りの爪による攻撃。

体術にも長けている自来也からすれば、それは非常に粗末な動きであると認知できる。

「……ッ……！」

レミリアの怒涛の攻撃。その一瞬を突いて自来也が無駄のない動きで拳を繰り出す。

「ちっ………！」

拳を避けたレミリアだが、逆手に持っていたクナイが頬を掠める。レミリアの頬から、一筋の赤い液体が滴る。

接近戦においても、レミリアを圧倒する自来也。

そして尚も攻撃を止めないレミリア。そのパターンには蝙蝠の翼による攻撃も織り交ぜられる。

それに耐えかねた自来也が、半分の殺気と、半分の遊び心でレミリアの腕を掴み上げる。

「やれやれ、粗末な動きだのオ」

レミリアの動きを読み、その隙について大きく振りかぶったレミリアの腕を掴み挙げた自来也。
本来ならばこの流れで腕を掴まれた者は齒噛みし、その実力差に絶望するものだが、レミリアは違った。

「ふふ、”弱いわね”」

最後の言葉をハッキリと、誇張して言い放ち、掴まれた腕をそのまま振り下ろす。

「——なにッ!？」

予想だにしていなかったレミリアの行動、そしてその怪力具合に表情が苦くなる。

幼い、華奢な少女の細腕が、鍛え上げられた大人の太腕を造作も無い、と言わんばかりに振り回す。

そして力任せに胴体を引き寄せられた自来也に、レミリアが掌底を打ち込む。

「ぐっッ……!!」

苦痛に表情を歪めたのは一瞬、その場から重力に逆らいふっ飛ぶ自来也。

吸血鬼だからといって弱点が多いだけではない。

人間では想像をも絶する力を持っているのも、吸血鬼の強味の一つだ。

体術の技術では完全に自来也がレミリアを大きく上回っていた。
しかし溢れんばかりの力を持っているレミリアの腕を、自来也が抑

えられるはずも無かった。

受身を取りながらも、レミリアに打ち込まれた部位を抑える。
身体の中から感じる嫌な痛みに、恐らくは骨がやられてしまったの
だろう、と考える自来也。

「くっ…とんでもない馬鹿力を持つとるのオ…!!」

レミリアの、吸血鬼の常識を逸脱した馬鹿力にかつての仲間の姿を
思い出した自来也。

「”馬鹿”は余計よ」

対するレミリアは、してやったり、といった表情で悠然と立ち尽く
していた。

背後に控えるのは、相変わらずの紅い月。

「こんなにも月が紅いからね、…本気で殺すわよ」

そう言い、覇気を顕>あらわくにするレミリア。

「やれやれ…こんなにも面倒な相手だったとはの…。こりゃあ、お
二人の力を借りる事になるかもしれんのオ」

覇気を顕にするレミリアに対し、自来也も同じく身構える。

幻想郷に来てからは一度も試したことのない、自来也のとおき
はまだ使わない。

二人の永い夜はまだまだこれからである。

Vsレミリア（後書き）

戦闘ばっかの上に回りくどい表現が多いけど我慢してね！
感想ありがとうございます。励みになりました。

完璧で瀟洒な従者（前書き）

はいどうも、章末とも言える紅魔異変の最終章を見る前に、まずは落ち着いてほしい。

今回の分はキャラ崩壊ともいえる、私自身でも何を書いていたのか覚えていないんだ、すまない。

でもね、これだけは言えるんだ。

こんなのレミリアではない、とね。

私は大切な何かと共に、レミリア好きな方達を敵に回してしまったんじゃないかと思っている。

まあ、落ち着いて最終話を見てほしいって事だけが言いたいんだ。

完璧で瀟洒な従者

「両者とも人外レベルねえ」

自来也とレミリアの死闘を遠目で見守る巫女——霊夢である。
突如一室が燃え出したかと思えば、またしても大洪水で鎮火される。
霊夢もまた、自来也の忍術の被害を受けていたのだ。

「にしても幼女のほうはとんでもない馬鹿力ね。」

小さい身形で成人男性を一撃でふっ飛ばしてしまうのも霊夢は観ていた。

ちゃんとスペルカードルールで戦ってるのかしら、と思っている処に新たな野次馬がやってくる。

「はあ、はあ… やつと、追いついたぜ」

箒に跨った金髪の少女——魔理沙であった。

「あんた何処言ってたのよ。もうあんたの獲物も取られちゃってるわよ？」

「むむむ、あの野郎エ…」

何がむむむ、よ。とツツコミを入れつつも、魔理沙の言葉遊びもスルーする霊夢。

そして一瞬の間が空いたところで魔理沙が事の経緯を説明する。

「どうしたもこうしたもないぜ。あの白髪頭が！」

説明も始まらぬうちに何かを思い出したのか、語調が強くなる。

「強い風が吹いて水の龍が襲ってきた！」

「ええ」

「そしたら霧が濃くなった！」

「そう」

「白髪頭を見失った！」

「それで？」

「……ずっと探してた」

魔理沙の事の経緯とやらの説明が終わった。

要は霧が濃くなり、自来也を見失った魔理沙がずっと探し回っていたという事だ。

自来也のほうは当然、先に進んでいたので魔理沙が見つかるはずもなく…という訳だ。

「あんたも大概ねえ」

どこら辺が大概なのか、程度の具合が分からないが幻想郷ではそれが普通なのだろう。

「って事で門番と魔法使いをぶっ飛ばして此処に来たぜ」

門番を倒してきたと聞いて霊夢は、あの門番も損な性格だ。と思った。

「この異変が解決したら私、此処の大図書館に通うことにするぜ」

「そう、なら精々あの白髪頭が勝つ事を願うことね」

謎の死亡フラグを残した魔理沙に、自来也とレミリアの決闘を見届ける二人であった。

——紅魔館の上で睨み合う両者。

自来也の機を窺う視線に、レミリアの覇気を纏った真赤に染まった瞳がぶつかり合う。

そして情勢が動くのにそう時間はかからなかった。

「多重影分身の術！」

何かを感じ取ったかのように自来也が忍術を発動する。

禁術指定とされている多重影分身の術だ。

物理攻撃の可能な実体の影分身を一人以上召還する術であり、消費するチャクラの量も膨大である為に禁術とされている。そして自来也が召還したのは自分を含めて四人の影分身だ。

「（へえ、あの子みたいな術を使うのね）」

レミリアがとある人物の事を思い出している間にも、四人の自来也

は襲来する。

——あの小娘の力は予想以上だ。

例えば技術で押し勝っていても、一撃を貰ってしまえばそこで終いだ。だからといって距離をとれば隙間のない厄介な弾幕を展開されてしまうだろう。

ならば、少しでも相手を翻弄させる影分身で攻めるか、或いは水遁系忍術で——

「ちッ…小賢しいわ…!!」

一対一の状況で技術面で押されてしまったレミリア。

幾ら四人に分身しチャクラ等が4等分になったとはいえ、技術力の面では単純に考えて四倍だ。

このまま交戦するには明らかに分が悪い。

瞬時にそう察したレミリアは、自慢の蝙蝠の翼を翻し宙に舞う。

「消えなさいッ！」

空中に飛んだレミリアを二人の自来也が跳躍し追撃する。

対するレミリアは、追撃してくる自来也に妖力を纏わせた爪…ヴァンパイアクロウで迎撃する。

一撃、二撃とレミリアの爪が振るわれる。

妖力を纏ったそれは紅く輝き、振るう、というよりは薙ぎ払う、といった表現のほうが正しいだろう。

「サーヴァントフライヤー」

言葉と共に、レミリアの前に魔方陣が展開される。

そして一拍遅れて蝙蝠弾が射出された。

自来也は飛んでくる蝙蝠弾を跳躍して避けようとする。
当然残る自来也は二人なので、その内の一人が跳躍して避け、
残る一人は蝙蝠弾を相殺しようとしている。

「どつちだ……こつちかッ！」

跳躍して宙に舞う自来也に狙いを定め、紅い槍をぶん投げるレミリア。
ア。

——どつちが本物だろうと関係ない。

たとえ狙ったほうが分身だとしても、残る一人は私自身で——！！

レミリアが空中で身構える。

自身をバリスタのように見立て、地上に残る自来也に向けて射出する。

その間にも空中に避けた自来也に紅い槍が命中したが、どうやら分身だったようだ。

デーモンロードアロー、とレミリア。地上の一人が本体と確信したようだ。

空中からバリスタのように突貫してくるレミリア。

対する自来也はそれを受け止め、迎撃しようとする。

——勝った、絶対に受け止められない。

レミリアは自信を持つての勝利宣言。

自身の莫大な妖力に加え、重力に習い肉体を鋼のように強化しているのだ。

並みの人間がまともに喰らえば、耐え切れず細胞が破壊されるだろう。

そして攻撃を防ごうとした自来也とレミリアが激突した。

「——勝った！紅魔異変、完ッ！！」

自来也の身体を一寸の狂いもなく貫いたレミリアが高々と宣言した。デーモンロードアローの体勢を解き、無事地面に着地するレミリア。そして心の中で言い直す。異変は終わらない、これからも続く、と。

「——確かに、コレで異変は終わりじゃのオ！」

不意に後ろから声をかけられる。妙な恐怖に襲われたレミリア、思わず身震いをしつつも後ろを振り返る。

後ろにいたのは、先程レミリアが身体を貫いた自来也であった。その自来也はレミリアを見据え、ニヤリ、と笑ったままだ。

「……面白い事言うじゃない。……アンタもう死ぬんじゃないの？」

腹部に風穴を開けつつも、悠然と立ち続ける自来也にレミリアがそう問いかけた。

レミリアの言葉を聞いた自来也は笑い出した。ガハハ、カッカカ。と言った、豪快な男笑いを続ける。

「——チッ」

額に青筋を浮かべ、苛立ちを舌打ちで表現したレミリア。そして自来也に振り返り、その小さな手に紅い色の槍を創造する。

「……目障りなのよ、消えてちょうだいッ!!」

言葉と共に槍で自来也を袈裟斬りするレミリア。

「——なっ」

しかし、それよりも早く自来也は白煙と共に消えた。
レミリアの紅い槍は、虚しくも宙を切り裂く。

「まさか…あれも、分身だったか……ッ!!」

予想外の分身に、奥歯を噛み締めるレミリア。

今思えば、腹部やら口元などから血液が出ていないうえに、瀕死の人間があんな態度とれるはずがない。

短い勝利の余韻に酔いしれていたレミリアには、気付く事ができなかった。

分身が消えた白煙から現れたのは、五人目の自来也。

驚愕や、苛立ちからレミリアはそう察する事しかできない。

紅い槍を大きく振り切ってしまったレミリアに、自来也の手にある
”風の塊”を防ぐ術もなかった。

「風遁『螺旋丸』」

低い姿勢から繰り出された風の塊は、レミリアの腹部へと命中する。
うっ、とレミリアの低い声が、苦しみの声ともとれる呻き声が漏れる。

螺旋丸がもろに命中したレミリアがふっ飛んだ。

螺旋丸の命中した腹部を中心に、身体が重力を逆らい回転する。

「ぐうッ……あああッ!!?」

耐えよう、としていたレミリアの奮闘も虚しく、螺旋丸に押されるようにふっ飛ばされた。

悲痛な叫び声を上げ、紅魔館の屋根の上からふっ飛ばされる。

少しふっ飛んだところで、紅魔館の時計台の柱に激突し、止まった。しかし、螺旋丸のほうはまだ健在であり、物凄い轟音と共に回転し続ける。

それも暫くして止んだが、レミリアは螺旋丸により半壊した時計台に磔られたままだ。

「ふう……決まったの」

影分身を囀に、レミリアに螺旋丸を直撃させた自来也。

紅魔館の上に一人残った自来也がふと上を見上げる。

そこにあつたのは、此方を見据える紅白巫女と、何時しか戦った白黒の魔女の姿。

そして更に後ろに控えるのは、未だ衰えを知らぬ紅い月――

「紅符『スカーレット・シュート』」

突如としたスペルカード宣言と共に、紅い弾幕が殺到する。

「――ぬうッ!?!」

辛うじて避ける自来也だが、レミリアの紅い弾幕は津波のように押し寄せてくる。

小さなものから大玉のものまで、全てが紅い弾幕は、目標物など関係なしに一面にばら撒かれる。

暫くして第一波が止むと、スペルカードの宣言主が姿を現した。

「はあっ……やってくれたわね……。今のは私も、四肢が？げてしまふかと思っ たわ……」

衣服がボロボロになりながらも、そう言い放つレミリア。

外傷は自然治癒しているようだが、精神的なダメージはかなりのものようだ。

「……私は人間如きには負けない。私は誇り高き吸血鬼、レミリア・スカーレット！」

再び名乗りをあげ、自身を鼓舞するレミリア。片腕を高々と掲げ、再び攻撃の体勢に入る。

「あれは直撃したらちとヤバイのオ……!!」

レミリアの掲げた腕の先には巨大な紅い弾。

直径数十メートルはあるうか、あんなものが直撃すれば紅魔館どころか、この辺り一帯が虚に消えるだろう。

「水遁・水龍弾の術ッ!!」

即座に術を発動し、レミリアへ向けて放たれる。

レミリアは自身へ向けて襲い掛かる水龍を見据え

「防げるものなら防いでみなさいッ!!」

「ちッ…阿呆が!」

逆上し、見境の無くなったレミリアがスカーレット・シュートを放つ。

付近に着弾したら避ける術がないと考えた自来也は即座に跳躍する。当然レミリアは自来也を目掛けてシュートしたので、軌道が高めになった。

水龍弾の術をモノともしないレミリアの弾幕は、自来也へと向けられる。

比較的遅めのスピードに、避けることも苦にならなかったが…

「——ッ!？」

辛うじてスカーレット・シュートを避けた自来也の背に、レミリアが抱きつく。

自来也は焦っていた。

ただの人間に抱きつかれたのならば、何とも思わない。

しかし相手は吸血鬼。その習性から察するに、レミリアのとり行動は明確であった。

体力の消耗に加え、精神的ダメージにより余裕のない笑みを浮かべながらも、レミリアが一言。

「貴方の血はどんな味がするのかしら」

そう艶やかに言い放ち、自来也の首元に噛み付くレミリア。今度は本物だ、とレミリアにもわかった。

人間の肌を感じる温もり、激しい運動による汗の匂い。

そして何よりも、自来也から感じる鼓動と、焦燥感は何よりの証拠であつた。

「ぐッ…!!」

首筋に無理矢理ねじ込まれたレミリアの牙に、苦痛を顔にする自来也。

そして体内の血液が抜かれる感覚。

レミリアは確かに自来也から吸血していたが、その半分以上を零してしまっている。

衣服を血に染めながらも、まだまだこれからだ、と言わんばかりに吸血を続けるレミリアだが…

「忍法・針地藏ッ!!」

「ッ!？」

突如として自来也の銀髪が硬化、無数の針となりて逆巻いた。

逸早くそれに気付いたレミリアが飛び退き、自身への被害を零にする。

首筋を押さえ、呼吸を乱しながらもレミリアの吸血行動を封じた自来也。

「はぁ……ふう。貴方、B型ね」

「どうやらこれからが本番みたいだのオ…」

腹を満たし、満足気な表情を浮かべるレミリアに自来也がそう言い放つ。

「ええ、食後の運動と行きましょうか…ッ」

対するレミリアも挑発的な発言をするが、その表情に余裕はなかった。

抑えきれぬ吸血衝動を満たす事はできた。

自来也の思わぬ反撃に、辛くも避ける事ができたレミリア。

レミリアとしては、吸血した後にその首を捻り潰してやろうか。と考えていたのでその実は失敗に終わっている。

そして自来也に対する吸血行動は、大したダメージには至っていないかった。

Side——レミリア

——受けるだけじゃあ、絶対に勝てない。

此方から攻撃を仕掛けなければならない。

遠距離からでは奴のほうが上手…、だからといって接近戦では二枚も、三枚も上手だ。

しかし、唯一奴に勝っているものが一つ。

…私のほうが遥かに力は上。

だが不甲斐ない話に、それも当てられなければ意味を成さない。

どうやって奴に私の攻撃を命中させるか。

馬鹿みたいに近づくだけでは、技術の面でも、技の多彩さでも私は遠く及ばない。

ならば奇襲すれば——いや、それが容易く成功するのならばこうして悩む事も無い。

私とは比べ物にもならない程の、修羅場を乗り越えてきた数。

そして対峙しただけで分かる、幾多の死合いをこなしてきた数。私の繰り出す一撃一撃を冷静に、かつ正確に捌いて行く様をみるだけで、苛立ちを覚える。

そしてその華やかさ、美しさをも同時に覚える自分に嫌悪感を抱く。

私の一撃を避け、多彩な術や武器で相殺してくる。

それに法則性はあるのか――ふと考えてみる。

「…………ッ！」

声に出さずに、私は攻撃を仕掛けてみる。

手の平サイズの小さな紅い槍を投げつける。

それは予想通りに、敵の持つ小さな武器に弾かれた。

私は続けざまに、今度は妖力を纏わせた蝙蝠弾を撃ち込む。

それはゆっくりとした軌道で、正確に目標物へと飛来してゆく。

「…………ッ！」

すると今度は、白髪頭には似合わない真赤な炎を吐き出してくる。

思考を巡らし続ける私に、彼の呟く術技の名称は聞き取れない。

恐らくは炎に関する技なのだろう。

室内での戦闘とは一回りも二回りも小さな、それでも豪炎と呼ぶには相応しい炎が私を襲う。

弱小な人類からすれば、恐らくは人の身を消滅させるのは容易い炎に見えるだろう。

しかし私からすればそれはちっぽけな、妖力による薄い結界でも防げる程度だ。

——これならば流水のほうが十二分に熱い。

薄い妖気の結界で防ぐ事ができたが、肌に感じる炎独特の感触に表情が緩む。

この程度の炎ならば、流れ廻り行く流水のほうが私にとっては恐ろしいし、畏怖の対象でもある。

敵の行動からある予測を立てられる。

恐らく敵は、パツと見ての実体と思える攻撃に対しては、物理的に対処する。

そして妖力弾——蝙蝠弾や所謂弹幕攻撃に対しては、間接的な炎などの術で対処している。

これらの予測が正しい、というのが前提でレミリアは再び攻勢に転じようとする。

いや、最早正否は関係ない。

やらなければ、やられる。攻撃しなければ、攻撃される。

恐らく、実証のないレミリアの予測を採用するのは難しいものがあるだろう。

だが、この可能性を信じるしか攻撃の予知がない。

馬鹿正直に、何も考えずに攻撃しては先ほどの二の舞。

それどころか、今度こそ仕留められてしまうだろう。

「防げるものなら…ッ！」

レミリアが腕を伸ばし、自来也へと何かを投げ飛ばす。

槍のような、先端は鋭利だが、棒状ではなく変わりに鎖が連なっている。

自来也は、この鎖を辿って移動をするのだろう。

と推測し、迷わずに手に持つクナイで弾き飛ばそうと、身を低くし構える。

そして――

「かかったっ！」

外見相応の高めの喜々とした声が響くと共に、先ほど投げられた鎖が自来也を貫く。

自来也が弾けずに、己の身体を貫いてる事に驚き、そして痛覚を感じない事に疑問を抱く。

「（あれは実体のない尖分銅鎖、やっぱり弾こうとしたわね……！）」

現実にはニヤリ、と笑みを零すレミリア。

訝しげに、自身を貫いた鎖を見やる自来也だが、鎖とレミリアが繋がっていると気づき即座に離脱しようとする。

「（チツ、速い……ッ！）」

実体のない鎖に有りつ丈の妖力を注ぎ込み、鎖を伝い攻撃する。しかし、瞬時にその場から離脱した自来也はその攻撃を喰らわない。

「（だけど、これも想定内……ッ！）」

鎖に注ぎ込む腕をそのままに、頭だけで跳躍する自来也に眼を向ける。

その表情は、仇敵を睨みつけるかのように鋭い表情である。

対する自来也は既に印を結び、火遁忍術をレミリアへ向け発動していた。

「（……また、火か。――水術を発動させていたら、負けていたところ

ろだ」

炎で迎撃してくる光景を見て、心から安堵するレミリア。そして腕を思い切り振りかぶり、またしても、今度は”実体”の鎖をぶん投げる。

放たれた。いや、射出された尖分銅鎖は、真っ直ぐに自来也へと向かう。

炎では相殺できない、と自来也は気付いたが、その時には鎖の先端は自来也へと到達していた。

成人男性の太い呻き声と、己の放った鎖が命中する感覚。レミリアはそれらが伝わってくると、一切の迷いを持たずに鎖に力を込める。

——チェーニング

追尾性能を持ち、実体の鎖が本体に命中すれば、それを伝いその先端位置まで瞬時に移動する事ができる。

逆に幻影の鎖ならば、それに妖力を込めた遠距離攻撃ができる。

「捉えたっ！今度こそ、絶対に…確実にッ！！」

自ら感じる、勝利へのカウントダウンに鼓動が早まる。

最早、自分が何を発言しているかも、どのような感情なのかも理解できない。

チェーニングか自来也に命中したのを確認し、レミリア自身も物凄いスピードで鎖を伝い、移動する。

「お前を屈服させる事ができれば、従者として従えるのも悪くなかった。

……だが、お前のような人間は——殺せる時に、殺しておくべき

だ」

喜々とした表情とは裏腹な、血走り、紅く染まった瞳。額に滲む汗が頬を伝うが、戦汚れした顔に付着した砂埃と混じり、顎に伝う事はない。

「——そう、お前は死ぬ運命……なんだッ!!」

激突、直撃するだけでお互いただでは済まないレベルのスピード。自来也に衝突する寸前、レミリアは己の制御できるスピードまで落ち着く。

刹那、その一瞬を突いて自来也が空いた右腕で迎撃——手に持つクナイでレミリアの首を刎ねようと動く。

「——とった！やはり、遅いッ！」

首を刎ねようと動く自来也の腕を、手首から掴み上げるレミリア。吸血鬼の凄まじい腕力に、自来也の腕が悲鳴をあげる。レミリアの血走った視線と、自来也の焦燥感を頭にしつつも、酷く落ち着いた視線が絡み合う。

——何故

レミリアが奥歯を噛み締めながら考える。

危機的状況に追い込まれ、尚も戦い続けるこの男。

その瞳からは恐怖は感じられない。

それは当然、目の前の影からも——

「何故…、どうやって……ッ」

自来也の手を取ったまま、ギリ、と奥歯を噛み締める。

そして額に青筋を浮かべ、その怒りを爆発させる。

「どうして、どうやって……」何時の間に……ッ！
こんな事、時間を止めでもしない限り――」

止めを刺す一呼吸前に感じた、違和感。

それは見事に目の前の自来也が影分身だという事をレミリアに悟らせた。

影分身の自来也の首を、その豪腕で刎ねたレミリア。
当然の如く上がるのは、血飛沫ではなくレミリアを嘲笑うかのよう
な白煙。

「お前も、咲夜のように時間を……ッ」

自来也の影分身を仕留め、レミリアが一人ぼっち。
誰にいうでもなく、そう言葉を呟くレミリア。

当然、姿を消した自来也が悪戯に答えるわけもなく、その自身の問
いには舌打ちで答えた。

「くっ……この私を……コケにして……」

そして溜まりに溜まった怒りを、遂に爆発させた。

強烈な怒気と覇気、そして辺りに紅色の衝撃波を撒き散らしつつ

「運命『ミゼラブルフェイト』」

スperlカード宣言。

先ほどのチェーリングと違い、更に大量の鎖が辺りを飛び交う。
右に左に、上に下。

標的など最初から無かったかのように、適当な位置に滅多刺しする。

「隠れているなら炙り出すまで…ッ！」

妖気を込めると、一面に滅多刺しになった鎖を伝いレミリアの妖力が着弾する。

鎖に触れているものは勿論、先端に刺さった物体を木っ端微塵に破壊してゆく。

立派な紅魔館の屋根も、いよいよ廃墟と化してきた。

S i d e ― 自来也

「隠れているなら炙り出すまで…ッ！」

その声を聞くや否や、グツと身構える自来也。

間一髪でチェーングングを、分身とは逆方向に飛び避けた自来也。しかし、状況は悪化するばかりであった。

怒り狂ったレミリアが紅魔館などお構いなしにと、無茶苦茶な攻撃を展開する。

これには流石に、地中に潜伏している自来也には耐え難い。

「ちィ…」

小さく舌打ちをし、たまらず姿を現す自来也。

遅れてそれに気付いたレミリアは、ニヤリと笑みを零す。

「くぅ…最早滅茶苦茶だのオツ!!」

言いつつも、頬をプクツ、と膨らました自来也。

そして吐息と供に土流を噴出し、目の前に土流による壁を形成させる。

土流壁は物理的な攻撃を無効にできる上に、チャクラや、チャクラの糸なども通さない万能な防御技だ。

実体と幻影が混じった敵のスペルカードも、これで防げるかもしれない。

自来也の考えは功を奏し、見事にレミリアの鎖を防ぐ。

それを目の当たりにしたレミリアは、怒りに口元を歪ませる。

「そんな土の壁なんて、私自ら……ッ!!」

紅魔館で一番高い時計台の柱に自身を固定するレミリア。

そして土流壁目掛けて物凄いスピードで発射、降下する。

大気を切り裂き、堪らず空気が轟音を奏でる。

紅い妖気を纏い、蝙蝠の翼を巧みに操り真っ直ぐに自来也へ向け突撃。

レミリアの得意とする技の一つ、デーモンロードアローである。

「(…壊れたッ!!)」

幻想郷の重力を味方につけ、自身の怒りのままに繰り出したそれは、当然の如く

自来也の形成した土流壁を打ち崩す。

衝突と供に、土壁が崩れる独特の音を立てながら、レミリアはその先にいる宿敵を目指す。

土流壁を破壊する事ができたレミリアが、心の中で思わず安堵する。そこでレミリアはふと、小さな疑問を抱く。

——何故、私は安堵しているのだろうか。

普段の私ならば、この程度の土壁など破壊できて当然と考えるはずだ。

そして何故、壊せた事に対しこんなにも喜々としているのだろうか。

心の中で自問自答を繰り返すレミリアの眼前が暗くなる。

「——えっ」

不意に、いくら思考を巡らせていたとはいえ、突然目の前が暗くなることに間抜けな声を出すことしかできなかった。

そして視界が暗くなる事に酷い恐怖を覚え、その瞬間が酷く長いものに感じえた。

レミリアの視界が真っ暗になると同時に、痛々しい、鈍い音が響き渡る。

「——っかはッ……」

か弱い、空気に溶けてしまうかのような声がレミリアから漏れる。

その眉間からは強烈な打撃を喰らい、痛々しい色に変色してしまつた痣。

それを中心に、鼻を分けほつれい線の部分を流れる紅い——赤い液体。

デーモンロードアローで突っ込んでくるレミリアを、自来也がカウンターで返した。

助走をつけ、小さく跳躍しながら自身に向けて突っ込んでくるレミリアの顔面を目掛けて膝蹴りをお見舞いしたのだ。

自来也に眉間を蹴り飛ばされ、無様にも紅魔館の屋根を転がるレミア。

それは二転、三転と続き、砂埃をあげつつも止まる気配を見せない。暫く転がり、時計台に激突する事でそれは終わりを告げた。

「……くっ……うっ……」

パラパラ、とふっ飛ばされ、倒れたときに被った小石を除ける。何とか立ち上がるレミアも、呻き声を上げながらの満身創痕状態。

ここまで闘い、情けをかけては彼女の威信を穢すだろう。と思っただけで思わずに、自来也はその殺気を抑えぬままだ。

「ふん、ここまでのようじゃのオ。…最後はお前さんの誇りを尊重してやるとするかの」

懐から良く磨かれ、手入れの行き届いたクナイを取り出す。刃物をぶら下げ、満身創痕の幼女に近づく青年。

第三者から見れば、どこからどう見ても自来也が悪人に見えることだろう。

「……くっ……」

フラリ、と立ち上がるレミア。

そして蝙蝠の翼を操り、霧散する。

体内の妖力が著しく低下したレミアが霧状になり消える。

「（コレなら、見つからないはず…。このまま、少しでも時間を稼げれば——）」

心の中で呟くレミリアを余所に、自来也がその場で小さく跳躍する。そして空中で下駄の歯と歯を噛み合わせ、ダンツ、と地面に着地する。

奴は何をしているのだろう、とレミリアが思ったのも束の間。自来也が手に持つクナイを何もない空間に投擲する。

「ッー!!」

霧に溶けていたレミリアが苦痛に顔を歪める。

その肩には先程自来也が投擲したクナイが突き刺さっていた。堪らず実体化し、地上に落下するレミリア。

「な…、何故…?」

地上に落下する程度の衝撃も、今のレミリアには耐え難いものであった。

クナイを肩に受け、地上に倒れ伏すレミリアを自来也が哀れみを含んだ眼で見やる。

「結界、と言えば理解できるだろう。」

倒れ伏すレミリアの目の前に辿り着く。

悔しそうに顔を歪ませるが、苦痛と混じりあっているのか、どちらを理由に顔を歪ませているのかは分からない。

或いは、両方の感情を含んでいるのかもしれない。

整った顔立ちには、眉間に痣を作り、顔を三分するかのようその中心から流血している。

「ふざけた異変を起こしおつて。…今、紅霧を何とかすれば見逃してやらん事もないぞ」

悲痛な面持ちに、心を動かされたのか。それとも、殺してしまつては異変の解決には至らないと考えたのか。
紅霧の主を殺したところで、紅霧が収まらなければ結局のところ、異変解決とは言えない。

自来也の”情け”にレミリアが顔を更に歪ませる。
最早、何を理由に顔を歪ませているのかは分からない。

自来也の言葉を受け、両腕を上げるレミリア。
その行動に若干の警戒を挿む自来也だが、目の前の霧の動きを見るに、紅霧を取り込んでいると理解する。

紅霧を自らの身体に取り込むレミリア。
長い時間をかけつつも、少しずつ、確実に紅霧を身体に吸収する。
暫くの間その行為を続け、やがて辺りを紅い月が照らし――

「――ハアッ!!」

「ッ!!!」

突如としてレミリアが自来也を襲う。
辛くも攻撃を避けるが、レミリアの異変に気付き警戒する。

「ふっ…ふふ…勘違いしないで頂戴。私は紅霧を消したのではなく、取り込んだ」

一つずつ、ゆっくりと紡がれる言葉。

「この紅霧はただの霧じゃない。…私の妖力の一部を媒体とした、紅い紅い霧…」

相変わらず身体はボロボロだが、精神状態が良好にも見える。

そして苦痛に顔を歪ませながらも、喜々とした表情で自来也に言葉を向ける。

「そして貴方は私に時間をくれた！私に、私の妖力を取り戻すための時間を…ッ！！」

自らを抱きしめ、力任せに、その力を試すかのように引つ掻き回す。種族は吸血鬼だが、姿形は幼い少女。

力任せに引つ掻かれた皮膚は抉れてしまうのではないか、という程に赤く晴れ上がる。

しかし、それも束の間。一瞬で自然治癒が行われる。

「・・・」

自来也は無言のまま駆け出す。

傍から見れば狂ってしまったのではないか、と思わせるレミリアの奇行。

手に持つクナイでレミリアに止めを刺そうと、駆け出す自来也。

自身を殺そうと迫る、自来也が見据えるレミリア。

先程までは、自来也の得体の知れない術技の数々と、迫り来る”死の運命”に恐怖していたレミリア。
しかし、今のレミリアからはそれが感じられない。
感じられるのは溢れる闘気と、殺意の衝動――

「悪魔『レミリアストレッチ』」

五枚目となるスペルカードを発動する。

自身の名を連ねるそのスペルカードが五枚目に使用される魂胆は分からない。

唯一つ分かるのは、自来也という人間を…確実に狩猟する為のスペルカード――

思い切り腕を振り被り、そのまま硬直するレミリア。

力を込めているのだろう。その素振りは今の自来也にはレミリアの僅かな抵抗なのだろう、と捉えた。

自来也のクナイがレミリアの急所に突き刺さった。

通常の間人ならば即死するであろう個所に、深々と突き刺さったクナイからは赤黒い液体が垂れ流れる。

「…ハアアああ……、ぐっ…ごふっ」

急所にクナイを突き刺され、深い溜息を漏らすレミリア。

長い溜息を吐くが、喉の奥から出口を求め溢れ出てくる赤黒い液体がそれを遮る。

呼吸を戻していたレミリアが、それには堪らずに咳き込んだ。

「――…ふっ、…ハハ……」

「なっ…！？」

ゆっくりとした口調でレミリアが言葉を紡ぐ。

自来也は、確実に殺したと思ったのか、完全に油断しきっていた。

「グリグリするなっ…、無茶苦茶痛いんだから――」

自来也に対する文句の言葉を最後に、振り被っていた腕を振り下ろした。

それは大斧――、振り下ろすというよりは、振り落としたといった表現のほうが良いだろう。

腕に有りつ丈の妖力を込め、スペルカードの効果により痛覚を極端に感じなくなっている。

それでも痛覚を感じる辺り、並みの人間ならば即死している一撃をモロに喰らっているからであろうか。

「はあっはあっ……私を刺し殺したいのなら、銀のナイフでも用意してくる事だなっ……」

悪魔『レミリアストレッチ』の状態のレミリアに攻撃を仕掛けた自来也。

しかし、痛覚が極端に薄くなっている状態のレミリアに、それは大したダメージとならなかった。

逆にレミリアの、地獄の断頭台を思わせるかのような一撃をモロに喰らってしまった。

「ぐうう…くそつ、油断した…ッ!!」

壁に叩きつけられ、ようやく停止した自来也。

生きているのが奇跡かもしれない。骨を何本か持っていかなかった良かったと思う自来也。

今度まともにあれを喰らえば、次の奇跡はないだろう。

上半身を起こした後も、すぐにふっ飛んできた方向に視線を向けて追撃を警戒する。

だが、レミリアからの追撃はなかった。

「身体が言う事を…ッ」

その場に膝をつくレミリア。

いくら吸血鬼で不死に近い身体を持っているとしても、急所を貫かれたのは尋常ではない。

何とか意識を保とうとするが、足が震えて立つ事ができない。

「……大した小娘だのオ。急所を貫いたというのに、まだ立ち上がるか……」

立ち上がるうとし、膝をついてしまっレミリアを見て自来也が素直にそう思った。

いくら吸血鬼とはいえ、人の成をしている以上心臓への一撃は重かった。

体内に血液を循環している機関に傷を負えば、当然その機能も緩慢になる。

「やはり——首を刎ねるか」

骨折した部位が悲鳴を上げるのも気にせず、立ち上がる自来也。

「——っ」

立ち上がる事すら許されないレミリアから小さい悲鳴のようなものが聞こえた。

「くっ…妖力は十分なのに、肉体がもたない…ッ」

そう悔しそうに呟くなり、立ち上がる事ができないと判断したレミリアは、蝙蝠の翼を使い宙に浮かぶ。

「無駄だ、もうワシから逃れる事などではせんよ」

逃走を計るレミリアに、自来也がそう断言する。
そして今までとは違い、ゆっくりと印を結ぶ。

「口寄せ・蝦蟇口縛り」

自来也が地に手を宛がう。

「——っなに、これは…」

低空に浮かんでいたレミリアの視界を気味の悪いものが埋め尽くす。
ピンク色の、動物のものと思われる体内機関。

自来也が口寄せしたのは、妙木山の岩宿・大蝦蟇の”食道”の部分だ。

得体の知らない空間に引き込まれたレミリアは、思わず地上とかわれる場所へ着地する。

「…うう、気持ち悪い」

ぐちゃり、と着地の音を立てる。

気のせいか、その独特な異臭も漂ってくるのがわかる。

「ここは蝦蟇蛙の食道だ。お主は既にワシの腹の中、というわけだ。」

自来也の一言は、レミリアの絶望感を増長させるのには十分であった。

その言葉を聞いたレミリアは、小さな手の平に紅い弾幕を形成させる。

「止めておけ、ちょっとやそつとの衝撃ではビクともせんよ」

その言葉に構わずレミリアは紅い弾幕を、蝦蟇の食道に展開させる。弾幕は食道の肉壁に命中するが、気味の悪い音を上げただけで出口となりえる穴は開かなかった。

「ッ！？ コレは、酸……？」

ピンク色の肉壁が、受けた衝撃と共に噴出した液体。

それは、蝦蟇蛙の胃酸であった。

「凄い酸性ね…、消化活動が始まったら唯じゃあ済まないわね…」

少量の胃液がレミリアに付着し、服の裾を溶かしてなお、レミリア

の色白な肌をも薄く溶かす。

「炎で焼いてそのまま日の出まで待つて灰に帰そうかと思ったがの。だが、ここは確実に仕留めたいところだしのオ」

腕を組み、ジツと構える自来也にも胃液が飛ぶが、それは意味をなさなかった。

「…こいつも幻影か」

胃液が付着しても溶ける事のない自来也を見やり、そう確信するレミリア。

そう思考を巡らせている間にも、蝦蟇蛙の体内の活動が活発化する。

「——ククク…」

不敵な笑みを浮かべるレミリア。

その手には、六枚目のスペルカードが握られていた。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

レミリアがスペルカードを宣言する。

神槍『スピア・ザ・グングニル』

グングニルとは、北欧神話の主神、オーディンが持つ投槍だ。

一説では、敵を貫いた後に手元に戻ってくると云われ、また回避不能の必中の槍とも云われている。

「——ッ、コイツあ当たったら拙い…いや、即死だろうのオ」

レミリアの手に握られた紅い、蝙蝠を象ったと思われる鋭利な刃。持ち主の溢れんばかりの妖力を、主の代わりに受け継がんとする神槍。

元々は尋問や拷問を主とする蝦蟇口縛りの術。

レミリアの目の前にいる自来也は、高等忍術による影分身ではない為にレミリアへ攻撃を加える事ができない。

「私はレミリア・スカーレットよ。たかが蛙程度の胃袋なんて、食い破って然り！」

口元を赤い液体で濡らし余裕の無い表情で、自信に満ちた声で言い放つレミリア。

言葉と共に抛られた神槍『スピア・ザ・グングニル』は蝦蟇蛙のグロテスクな肉壁を抉る。

一撃で幾度も衝撃波を放つグングニル。その衝撃波がリズムを刻むかのように、蛙のグロテスクな胃袋を食い破る。

「…やった、コレで外に…！」

ぽつかりと、だが人間一人が出入りするのがやっとのサイズの穴が開いた。

自来也の分身は、ただその光景を見送る事しかできなかった。

「ぬおおおツ……!!?」

蝦蟇蛙の食道の外にいた自来也に向かい、神槍が物凄い速度で突っ切った。

間一髪それを避けた自来也の目の前に、神槍の持ち主が姿を現す。

「ふっ…やはり造作も、ない」

ふう、と呼吸を一つ置いて危なげなく着地するレミリア。

極端なまでの過剰な妖力を回収し、力が増幅した代わりに激しく疲労もした。

だがそれも、先程抛った神槍が上手く均衡させたお蔭か、表面上に冷静さを取り戻すレミリア。

「とんでもない餓鬼じゃのう、蝦蟇の食道を破壊するなど…」

まるで恐ろしいものを見た、といった表情でレミリアを見据える自来也。

そんな表情を浮かべる自来也にレミリアが語りかける。

「私にはね、運命が見えるのよ。」

体中から流血し、体内の血液がなくなってしまうのではないか、という程に出血している。

しかしそれでも尚、語る口調に怯みは見えないし、虚勢も張らない。

「でも可笑しな事に、貴方の運命が見えないのよね。…だって、貴方もう死んでるんだもの」

「お主には目の前に二本の足で立っている者が死体に見えるのか？」

自来也の軽口にも動じないレミリアは、更に言葉を続ける。

「そうね、冥土の土産に教えてあげるわよ。私の能力は、運命を操る程度の能力。」

——能力

この地には数々の能力を扱う者が存在すると聞いている。

人里にて世話になった二人も、それに該当する者達だ。

そして目の前にいる吸血鬼も、或いは道中出会った者達も能力者なのかもしれない。

「——貴方の運命は既に終わっているのよね。死んだ人間の運命なんて見れるわけない。

でも今の私には眼で見て理解できる。……”お前は私の手によって”殺される運命が！」

「——しまっ」

レミリアの言葉を最後に、自来也の背後から先程抛った

神槍『スピア・ザ・グングニル』が戻ってくる。

レミリアの語り口に嵌っていた自来也の背後を、神の槍が突き抜け

「……った、と言つても思つたかのう」

突き抜けなかった。

身一つを横にずらし、神の槍を髪の毛一本ほどの差で避ける。

「……ちッ」

神の槍を受け止め、悔しそうに地団駄するレミリア。

音を切り裂く速度ともなり、絶対に避けられるはずはなかった。

「フン、その程度の浅知恵でワシを殺ろうとはのオ。お前とワシとじゃ、踏んできた場数が違いすぎる!」

言葉と共に手裏剣を投げる。

先程の神槍とまではいかないが、十分に高速の域に入る手裏剣。

「ッ!」

不恰好になりながらも、飛来してくる手裏剣を槍の柄を使い叩き落とす。

その様を見る限り、槍術に通じているとはとても思えなかった。

「くそっ、何故…絶対に避けられないと思っていたのに…」

後ろに眼でもついているんじゃないか、と疑うレミリア。

「阿呆めが、ワシとお主とでは戦闘経験に差がありすぎるよつだのう」

紅魔館全域には既に、自来也が探知結界を張っているのだ。
足を踏み入れれば瞬時に敵を探知する結界が、再来する神槍を探知していたのだ。

自来也の罵声挑発を受け、神槍を再び手にしたレミリアは、舌打ちをし

「だったら、私自ら当ててやる…ッ!!」

神槍を掲げ、元々紅い槍が更に紅き光に包まれる。

それはレミリアが、グングニルに妖力を注ぎ込んでいる事が解かる。

「——神槍・スピア・ザ・グングニル」

スペルカードによる宣言ではなく、自らが技名を宣言する。

腕を天高く掲げ、紅い槍を用いて振りかぶる。

当然、自来也も唯漠然とグングニルを受ける訳がない。

右手と左手の平を合わせ、既に印を結び終えた自来也が最後の術を使用する。

「乱獅子髪の術」

自来也の芸術的ともいえる白銀の長髪が蠢く。

容姿が若返っても、その白銀の長髪は現来衰えはしない。

元々、青年時代も同じように長髪を結んでいた事も関係してくるの
だろう。

「ッ!?! 髪の毛でこんな…」

蠢く白銀の長髪は、一本一本が意志を宿しているかのようにレミリアを急襲する。

毛髪が麻縄の役目を担うかのように、神槍・グングニルを握る腕を縛り上げる。

「クツ……自分の毛髪をも武器に使うとは……だけど、こんなものッ」

縛り上げられた腕に力を込め、無茶苦茶に振り回す。

しかし、腕と神槍を縛り上げる毛髪は千切れる気配を見せない。

両の手の平を合わせ、自身の毛髪にチャクラを注ぎ込む自来也。

レミリアを縛る毛髪の威力をチャクラで調整しているのだらう。

これで終わりだ、と言わんばかりにダン、と右の足を勢い良く地面に叩きつけた。

「——ッ！！？」

レミリアの腕を縛り上げていた白銀の毛髪に、圧がかかった。

腕を絡める毛髪が、強烈な圧力をかけてレミリアの腕を破壊する。

関節があらぬ方向へ。元来、決して曲がりはない部位が強烈な圧力の前に折れた。

「ゲウツ、はアア……ッ」

喉の奥から漏れる叫び声を、誇りと威信が塞ぎ止める。

それでも漏らしてしまうのは、異常なまでの激痛に脳が緊急を伝え

ているからだろう。

忍法・針地藏が毛髪を用いた防御忍術と言えば、乱獅子髪の術が攻撃寄りの忍術とは良く言ったものだ。

縛り上げたレミリアの腕を、あつ、という間に”破壊”してしまった。

レミリアはその苦痛の前に、自ら具現した神の槍を手放してしまう。

吸血鬼の腕を破壊し、尚も乱獅子髪縛りの術を解かない。

寧ろ腕を圧する毛髪よりも、更に膨大な量の毛髪を束ね、レミリアを包み込む。

「ッ、犬畜生が…私をこんな目に…ッ」

四肢を動かせず、屈辱だばかりに自来也を罵る。

対する自来也は、自身の毛髪にここぞばかりに圧力を注ぐ。

「さよならだ、の」

「…ッ!!?」

白銀の毛髪が強烈な伸縮活動を始めた。

それと同時にレミリアからは、誰がどう聞いても死を想像させる悲鳴が聞こえ――

「むっ…!!?」

聞こえはしなかった。

膨大な力を注がれた白銀の毛髪は、獲物を圧死させんと収縮した。圧力が逃げ場を求め、中心部に捕縛されているレミリアを押し潰さんとした。

だが、悲痛な声を上げる直前にそれが消えた。

代わりに乱獅子髪が押し潰したのは、怪獣の着ぐるみであつた。

中身のない怪獣の着ぐるみを押し潰し、内部に毛髪で形成した刺突が幾重に渡って突き刺さっていた。

標的を逃した自来也が、訝しげに辺りを見渡す。

見渡したところで眼に飛び込むのは、一部倒壊してしまった紅魔館。そして、主人を抱き上げる従者の姿。

「何のつもりだ。というか、まだ此処に居ったのかお主」

微かに怒気を含めて言い放つ自来也。

「何のつもりだ、と言われてもねえ。それに此処、私の主人の住処なんだけど」

レミリアを庇い立てた完全で瀟洒な従者——十六夜咲夜。

咲夜が時間を止め、自来也の乱獅子髪 of 術からレミリアを救出したのだ。

「力による拘束術なら、私の能力でどうともなるわ。」

気色の悪い部屋に閉じ込められるのは勘弁だけだね、と言葉尻に付け加える。

乱獅子髪 of 術の一瞬の一撃で、意識を飛ばしてしまったレミリア。

一見情けない話だが、傍観していた者からすれば、今まで良く耐えたとも思えるだろう。

「お嬢様はもう戦闘できる身体ではないのは貴方も熟知しているでしょう？」

それとも、このままお嬢様を殺すつもりなのかしら」

自来也を再び敵意の眼差しで睨む咲夜。

「それに、もう紅霧も収まっているわ。貴方が戦う理由はもう無いんじゃないかしら？」

「ワシはある人物に異変を解決するよう依頼されておつての。

…元凶を潰さなければ根本的な解決にはならんだろーのオ」

手裏剣の輪に指を通し、道化のように指先で回転させる。

余裕がある、相手を嗜めているとも思える態度だ。

「さあーで、そいつを渡してもらおうかのオ」

任務は絶対——という、前の世界での教訓が残っている。

それは幻想郷に堕ちて来た自来也の、小さな抵抗心があるからかもしれない。

いくら時間を操り静止させる事が可能な咲夜といえど、先程の戦闘の傷が癒えぬままかつ、

主人を保護しながらの戦闘は無謀ともいえる。

「くっ…紅霧の根本的な解決、つまりお嬢様の抹殺が目的か…。最早お嬢様は戦闘できる状態ではないというのに…」

咲夜が何とか状況を打開できないか模索する。

しかし、浮かぶのは負の感情ばかり。頼れる人物達は皆倒されている事だろう。

「パチュリー様は恐らくあの白黒に…、メイリンも巫女に伸されているし…。」

パチュリーは自来也の分身の後、魔理沙と戦闘になり撃墜された。メイリンは門番なので、敵が目の前にいる時点で期待はできないだろう。

「小悪魔じゃあ戦闘にならないし、妖精メイド達では時間稼ぎにすら…あつ」

主人を抱える咲夜がある事を思いついた。

「”妹様”なら…、それにパチュリー様が撃墜されてるのならその封印も緩くなっているはず…！」

けれど奴からどう逃げ切るか、それに妹様の封印されている地下は瓦礫で埋もれている…」

咲夜が思考を巡らす、解が出てこない。

自分一人ならば時を止めつつ、更に地下への道も拓けるだろう。

だが、両腕に主人を抱えるハンディキャップは大きかった。

目の前の敵を退けるどころか、それから逃れる事すら難しいだろう。

「万策尽きたようじゃのう、綺麗な女子を二人も殺すのはちと心苦しいが…致し方あるまいッ!!」

漠然と立ち尽くす咲夜に痺れを切らした自来也が遂に攻撃を仕掛ける。

手に持っていた手裏剣を咲夜目掛けて投擲する。
そして即座に印を結んだ。

「手裏剣影分身の術!」

咲夜を目指し飛来する一枚の手裏剣。
だが自来也の忍術によりその数が二枚、四枚とその数を増やしてゆく。

「くうッ——」

レミリアを抱えつつも迎撃か、或いは逃れようとした咲夜が口を濁した。

恐らくそのどちらかを選択しても、十割の効果を得る事はできぬであらう。

「警醒陣!」

突如として咲夜の目の前に結界が現れた。
凜としたその声は、馴染みある者ならば即座に人物を特定する事ができるだろう。

「ぬ…、あの巫女か」

馴染みのない者でも、霊力の発信源を辿る事で人物を特定する事ができた。

自来也の放った無数の手裏剣は、霊夢の張った結界により咲夜に届く事はなかった。

「そこま「そこまでなのぜ！」…」

自来也の攻撃を止める声がほぼ同時に聞こえてきた。

「あんたは黙ってなさいよ、主人公は私なんだから」

「しょうがないな、今回は譲ってやるぜ」

霊夢と魔理沙が短いやり取りを終え、再度自来也に声が向く。

「やれやれ…気を取り直して。これ以上吸血鬼に攻撃を加えたらア
ンタの負けになるけど、それでも良いの？」

「ワシの負け…だと？」

霊夢の言葉に自来也が疑問を抱く。

「外人だからしょうがない、という訳にはいかないけど。
相手を負かした後に追い討ちをかけて殺す事はルール上禁止されて
いるのよねえ。

力を持った外人には良くある事ね」

自来也を見つめ、言葉を捲くし立てるとヤレヤレと言った表情をす
る霊夢。

小ばかにされている気がした自来也だが、精神的にゆとりを持って
いるようなので特に気に止めることもなかった。

「ふむ、そういえば先生も言っておったのオ。…だが、こやつを討
ち取らねば異変を解決した、とはいい切れんぞ」

自来也は抱く疑問を霊夢にぶつける。

「そこは話し合いで解決するしかないわね。或いは吸血鬼が力を取
り戻してから再戦、かしらね」

こんな状態だしね、と自来也の視線を促す。

自来也もそれに習い周辺を見渡すと、廃墟と化している紅魔館とボ
ロボ口の吸血鬼とメイド長の姿が眼に飛び込んだ。

「ま、紅霧も消え去っているし。とりあえずは解決、という事でも
問題はないわね」

空を眺めると、既に深夜とはい言難い。

紅かった月は堕ち、太陽の光が徐々に見え隠れしていた。

「あんた達も早くお暇したほうがいいんじゃない？そろそろ本当に
死ぬわよ、その吸血鬼」

続けざまに霊夢が咲夜に言い放つ。

吸血鬼にとって太陽の光は、身を灰化させてしまう程の驚異となり
得るものだ。

「……ちっ、人間に情けをかけられるとは……」

——アンタも真人間でしようが、と呟いた霊夢の声は咲夜には届かなかった。

「さて、アンタはどうするの？」

まだ納得のいかない表情を浮かべている自来也に霊夢が訊ねる。

「……ま、とりあえずは解決、かのう」

どうやら自来也はそれで納得の様子だ。

これ以上追い討ちをかければスペルカードルール上負けになる。

例え霊夢の言葉を見殺して追い討ちをかけようとしても、彼女らの手によって止められるだろう。

「アンタが存外まともな外来人で良かったわ」

——存外まともな……、という言葉に引かなかった自来也。

博霊の巫女と人里でも聞いた単語を思い出し、良い機会だと霊夢に質問する。

「ワシがまともなのはオ、ワシ以外の外来人は狂っててもいたのか

「？」

「…そーねえ、不死身な奴だったり、自身の能力を過剰して幻想郷のパワーバランスを崩そうとした奴もいたわね」

「そいつらまだいるのか？」

「もういないわよ。そういった類の奴らは私が結界の外に追い出してやったわ。…後者の場合は逆に幻想郷の住人に殺される結果が多いけれど。」

「…そうか、あーっと」

自来也が言葉を濁したのに気付いた霊夢が即座に言葉を返す。

「霊夢よ、アンタも外来人なら博霊神社の存在ぐらいは知ってるでしょ？」

「金に縁のない神社だけだな！」

「うつさいわねえ魔理沙、あんたは黙ってなさいよ」

博霊神社のマイナスイメージを自来也に叩き込もうとする魔理沙を霊夢が静止させる。

自来也は霊夢の名を知らなかったので言葉を濁した。だが、霊夢自身先に名乗ってきたので、こちらとしても名乗らないわけにはいかない。

「ワシは自来也だ。巫女さんよオ、”結界の外”とはどういう事な

のかのう」

自来也の質問に霊夢が顔を若干渋くした。

「あーハイハイ、細かい話しは後で教えてあげるわ。…つまるところね、幻想郷という

隔離された世界から元々存在していた世界に帰す、という事よ」

ザックリと解だけを伝える霊夢。

「ほオ、最近の巫女はそのような事もできるんだな」

「ま、そいつが生きていればの話だけれどね。死んだまま結界の外に放り出したら…検討もつかないわ。」

霊夢の最後の言葉に、自来也が顔を曇らせた。

それを見た霊夢が何かを閃いたように、自来也へ言葉を投げかけた。

「へえ。アンタ、死んで幻想郷に来たのね」

「お、おい霊夢…」

霊夢の言葉に自来也が驚いたように顔を上げた。その表情はまるで、心を読み透かされたかのようなものであった。

横に居た魔理沙も、少々相手にはキツイ一言を投げた霊夢を諷めるかのようなであった。

「大丈夫よ。心技一体、技があるのなら心も据わっているでしょ。逆にできていなかったらその程度、ってことね。」

普段の霊夢からは想像できない一言に、魔理沙はアングリ口であった。

「ガッハツハ！面白い小娘だのオ。…そうだな、元の世界に戻るものなら頼んでおつたろうが。」

お主の言つとおり、どうやらワシは死んだせいでこの幻想郷という地に迷い込んでしまったようだしのオ」

「死んだ身で戻ったとしても、魂のまま彷徨い続けるか…運が良ければ転生できるんじゃない？」

小娘、の一言で若干期限を悪くした霊夢の言葉。

転生という新しい単語が出てきたが、自来也は然も興味なさそうに会話を続ける。

「次の生に興味はないのオ…、”自由気まま”。それがワシの性に合う生き方だ。」

「それなら此処が最適ね。非常識人ばかりだし、種族も入り乱れている。」

私みたいな真面目な人間には生き辛いトコだけどねー」

「…何言ってやがんだこの腋巫女は」

魔理沙のジト目に耐えつつも、霊夢が言葉を返した。

先程から霊夢と自来也の対話であり、暇を持て余した魔理沙が口を開いた。

「それにしても、”自来也”の喋り方は何だか爺さん臭いよな」

自来也、と己の名を呼ばれ、突然口を開いた発言の矛先が自分である事を意識した。

「ム、そっちの黒いのは確か…魔理雄だったかのオ」

「・・・ああ、魔理沙だぜ」

前世は爺さんだったか、と魔理沙が嫌味ったらしく自来也に告げる。

「ガツハハ！ワシは蝦蟇仙人と呼ばれておったぞ！」

「あーそうかい、若返ってるのに耳が遠いまんまだぜ」

短いやり取りだったが、魔理沙が自来也を敵対視するには十分な会話量であった。

そこから若干の静寂が起こり、各々でそれを意識した。

「――で、アンタはこれからどうするの？」

霊夢の質問に自来也が答える。

「そーだのオ…とりあえずは人里に戻るとするか」

自来也の言葉に、霊夢が若干驚いた表情を見せた。

「へえ、人里に住んでいるのね。」

何か拙い事でもあるのだろうか、疑問を抱いた自来也が言葉を返す。

「何か、曰くつきのものでもあるのか？割と里の外れのほうに居を構えているんだがのう」

「…それが一番拙いパターンねえ。人里に近ければ大丈夫だったろうけど、…そうね、天狗には気をつけなさいな」

またしても新しい単語が出てきたのを、自来也が質問で返した。

「天狗、とは？」

「天狗はね、この辺りにある妖怪の山というところを縄張りに入っているのよ。」

解かりやすく言えば妖怪集団つてところかしらね。縄張りに踏み入ると襲われるから気をつけたほうがいいわね。

まあ、気をつけるのはそこじゃなくて記者のほうなんだけどね」

最後のほうが小さく口籠っていたので聞き取れなかった自来也。今回は天狗、妖怪の山という新しい情報の収穫があっただけで良いか、とそこで納得した。

「じゃ、今度会ったらまた弾幕勝負だぜ！」

最初に踵を返したのは魔理沙であった。再戦希望を自来也に伝え、箒に跨り物凄いスピードで紅魔館を後にした。

「相変わらずふざけた速度ねえ」

霊夢と自来也が魔理沙を見送り、霊夢が思わず呟く。

自来也も、異変が解決したとあらば此処にいる道理もない、と言わんばかりに

「さて、ワシも人里に戻るとするか！事後報告もせねばならんな」

恐らく自来也を保護した能力ある人物がいるのだろつ、と霊夢は予想した。

しかし、自来也を異変解決に差し向けた辺り、そこまで悪の意識ある者ではないのだろつ。

「またね、自来也。今度私の神社に参拝に来なさいよ。…勿論お賽銭は忘れずにね」

霊夢が別れの言葉を自来也に告げる。

”またね”と告げる辺り、再開する事を望んでいるのであろつ。

「あいわかった。生きていたらまた会おうのう」

自来也の返しに、霊夢がそつと笑みを零した。

普段は寡黙な霊夢には珍しい笑み、であった。

「——ふん、そう簡単に死ぬようなタマじゃないわよ、アンタも私もね」

霊夢が嘲り笑いながら、ボン、と白煙と供に姿を消した自来也に言

に残した。

悪意を持ち嘲り笑ったのではなく、冗談半分…つまり友と友の意味で嘲り笑った。

自身では常識人だと思っている霊夢も、周りからは非常識人と思われるている。

それもあったか、幻想郷で一番の非常識人ともいえる霊夢は、自来也から何かを感じたのかもしれない。

事実、短いやり取りであったのに、胸の奥から感じる言葉にはできない何か――

「さて」

考えるのも面倒だ、と目の前の現実を意識を向ける霊夢。

目の前には誰もいなくなり、静寂を維持しつつある紅魔館跡地。

「異変も解決した事だし…、博霊の巫女はお呼びではないみたいね」

宙に浮かび、遙か下に位置した紅魔館に目をやる。

そこには、米粒以下になった人間が世話しなく動き回っていた。

恐らくは先程のメイド長か、陰鬱な魔法使いか、はたまた門番か。復活した吸血鬼が自来也に復讐しなければいいが――

「ま、その時はまた解決すれば問題ないか」

くるり、と旋回し、自らの居るべき場所へと帰還する霊夢。

異変を解決した朝の日差しは、吸血鬼には眩しかった――

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
!

完璧で瀟洒な従者（後書き）

とりあえず、第一話と同じ感じでコレで一区切り。切りがいいし、何だか自分でも何書いているのか分からなくなってきた。

とりあえずは、戦闘描写に無駄が多かった。同じ事何度も繰り返してる気がする。文字稼ぎのつもりはないんだけどね、癖で書いてしまう…。

書いてみて思ったのは、やはり幻想入り物は描写が難しい。個人の感情を描くシーンでも、オリ主と違って口調や性格などを考慮しなければならいってのが特にな！

それで思ったのが一つ、オリ主物書いてみようかなあと！でもオリ主物はそれで、主人公を読者が想像できないケースが多いと思われる。

その点を考えれば、幻想入りものならそういった事がないからいいんだけどね。キャラ崩壊を考えなければね！

それでオリ主物ならそれで、NARUTO準拠して見ようかなと。簡単などころでは、服装は中忍の制服、性格は穏やか、残酷or云々etc…

みたいな感じで色々考えられて楽しい。でもそういうの決定しちゃうとまた描写が難しくなるんだけどね！ね！

まあ、次に書くとしたらこの小説の続きか、NARUTO技使っち

やうおー p ^ のオリ主物か。

なんだかこの小説感触悪い気がしてならない。やっぱり描写がぐどかったかー

で！

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。

最終話感触良かったら亀仙人的なノリでもうちびつとだけ続くぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0624q/>

東方 自来也が幻想入り 続

2011年1月22日17時46分発行